
想像が創造を具現化させる

アマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想像が創造を具現化させる

【Nコード】

N6951Y

【作者名】

アマ

【あらすじ】

空を飛べない、魔法が使えない。そんな人間に「創造」という、魔法のような技術が使えるようになった。

「創造」は、人間の「想像」によって生み出される。人間の「想像」によって「創造」が生み出され、「創造」したものを「具現化」することができる。

物語の主人公、不動終夜は、この「具現化」が大の苦手だった。中学時代は、まわりから馬鹿にされ続け、友達もほとんどできない

始末。

そんな終夜が、高校で新たな物語を創りだす！

第一話 憂鬱な実技試験（前書き）

「“そうぞう”を超えた先には」のリメイクです。前作のはネタバレ防止のため削除致しました。前作のとは内容がまるっきり違いますので、完全に忘れてください。

第一話 憂鬱な実技試験

人間はつまらない………

とある人間がふと思つたことだつた。

なぜ人間は空を飛べない？なぜ人間は魔法を使えない？

これらは人間、誰もが一度は求めるものではないだろうか。

求めてはいてもとても叶うことではない、そう誰もが思っていたはずだ。

だが、そんな人間にも何か特出しているものがあるのではないか、とそんなことを考え出した。

そして、一つの答えに辿り着く。

それは「想像力」。

漫画、アニメ、ゲーム、小説、ドラマ………

どれも人間が無から考え出したものだ。

もともと魔法という概念は誰が考えた？人が空を飛ぶという想像を誰がした？

どれも人間の想像から生まれたものだ。

天狗や河童等の空想上の生き物は多々あるが、その中で明らかにされている存在、『仙人』。

遙か昔、仙人は無から物を生み出す力を有していたと言われている。これは頭に浮かべた物を具現化させたのではないだろうか。

この仕組みさえ分かれば仙人の子孫と言われているすべての人間にも扱うことができるのではないだろうかと考えた。

そしてある日、それは現実となった。

無から有を作り出す能力。

いくつか制約はあつたが、『想像』を『創造』することを可能にした。

だが、これは決して超能力や魔法ではない。

人間が持つて生まれた能力だ。

人間はつまらないものではなかった。

素晴らしい能力を持っていたのだ。

ただ今までその使い方を知らなかっただけ。

この日から、新たな物語の幕開けとなる。

これはファンタジーが現実となった『想像』を『創造』する物語・
・・・

「はあゝ憂鬱だ」

この少年の名前は不動終夜。^{ふどうしゅうや}

ワックスで髪を整えた、どちらかというと幼い顔立ちをしている。

目つきも温厚な目をしていて、人当たりがよさそうだ。

「いい加減覚悟を決めろよ」

「湊はまだいいよ。ちゃんとできるんだから。それに別に覚悟を決めてないわけじゃない」

湊と呼ばれるウェーブのかかった茶色のボブヘアの男がやれやれと肩をすくめる。

「まあ確かに終夜ほど『創造』の『具現化』ができないのも珍しいけどさ」

創造・・・・想像によって無から造りだすことの過程を指す。
中にはすでに在るものを別の形につくり変えていく行為という意味でも用いられる。「創造」によってものを生み出すことを「具現化」という。現代の人間のほぼ全員にこの創造という能力が備わってい

るため、創造ができないということは昔で言う、勉強ができないということと同義となる。要するに社会的にも虐げられてしまう。高校ともなると創造ができなければ入学することは難しいのだが、終夜は筆記テストだけで名門とも言われる鷹左右学園たかそうに入ることができた。

創造が重要である現代の世の中で、筆記だけで受かるとなればほぼ満点でなければならない。終夜はそれでもまったく創造ができない自分が、この名門とも呼ばれる鷹左右学園に入れたことに疑問を覚えながらも当時は喜んだ。

「だけど名門だからこそ当然実技が重要視されるのは分かっていたはずなのに・・・」

要するに朝也はこの学園の落ちこぼれだった。運よく受かっただけで、本来この学園にふさわしくない人間だと。

それが理由で入学したとはいえ、朝也にはこの学園で友人と呼べる存在がここにいる月城湊つきしろみなとしかいなかった。

「お前が具現化できないなんて皆知ってるんだから、今さら怖気づくことはないんじゃないか」

「他人事だなあ」

「そりゃあ俺はできるからな」

「はぁ・・・」

終夜が再びため息をついたところに放送が流れた。

“これから学年ごとに合同の実技試験を行います。Aクラス以外の

一年生は校庭に集まるように”

昨日が入学式だった、入学したての一年生には生徒の実力を測るために実技試験が行われる。

ちなみにAクラスだけ校庭に集まらないのは、彼らが「魔法使い《ウィザード》」と呼ばれているからだ。

魔法使いのようになんでも出せるほど創造に長けている生徒に、「魔法使い《ウィザード》」という称号が与えられる。

この「魔法使い《ウィザード》」を与えられた生徒は一学年に三人しかおらず、Aクラスに集められる。

ウィザード級の生徒はその学園にとって、戦力的にも非常に大きく重要な存在であるため、一般の生徒の前でむやみに創造を見せないようにしている。

といっても、そう思っているのは教師だけであり、別段行動の制限はされていない。

「ほらさっさと行くぞ」

「りょーかい」

生徒たちにとって大勢の前での実技試験というのは、自分の創造自慢の場と言っても間違いではない。

終夜たちが廊下に出ると、生き生きとした表情の生徒が多く見られた。

そんな中で一人憂鬱そうな顔をしていれば、これまた目立つ。

「お、あそこに暗いやつがいるぞ」

「ほんとだ。楽しい楽しい実技の時間なのになんで暗いんだろうな」

「おいおいお前ら、そういうこと言つのはやめとけって」

湊以外で味方してくれる人が、と一瞬喜んだのも束の間、次の言葉でその喜びも一瞬にして地に落とされる。

「何もできないからだろ。残酷なこと言つなよ」

「そりゃそうだ。すまんなあ、残酷なこと言つて」

「あはははは」

「お前らいい加減に・・・」

「いいんだよ湊。さつさといくぞ」

慣れているのでもう気にしない。

こんなことはなにも高校に入ってからではないのだ。

中学の時にはすでに孤立していた。

人当たりのよさそうな顔をしているため、時々女の子から声はかけられていたのだが、入学したての終夜はものすごく暗かった。

一年も経てばさすがに普通に戻ったが、時すでに遅し。気づけば自分の周りには湊しかいなかった。

湊とは中学の時から付き合いなのだが、湊だけは朝也と普通に接してくれていた。

「なあ、何回も確認するようで悪いんだけど、本当にお前の媒体はそれで正しいのか？」

媒体とは、創造するときの必須アイテム。現実世界で自分が一番大切にしているものを媒体に選ぶ。現実の中で自分が大切にしている

ものを想像の世界に持ち込むことで創造をより正確にできるようにするためだ。

媒体がなくても創造はできるが、精度が大きく低下し、非効率になる。魔法使い級と呼ばれる人でさえ満足に扱うことはできなくなるほどだ。

だが、自分が一番大切に行っているという性質上、なかなか見つからない人や媒体が変わる人がいる。本当に大切なものなら媒体を変えることは可能だが、そういう人はたいてい創造がうまくならない傾向にある。

「お前のそのペンダント。誰からもらったのか覚えてないんだろ？」

「まあ、ね。だけどこれ以外に特別なものがないからな」

終夜が服の中からペンダントを取り出す。中が開く形式になっているのだが、中には何も入っていない。気づいたときには、終夜はこのペンダントを身に付けていた。

「湊は媒体がそれだって、どうやって分かったんだ？」

湊の媒体は音楽で指揮者が使う銀色の指揮棒だ。

「俺はこれを物心ついたときから持たされてきたからな。俺もこれ以外考え付かなかった」

「特別なものって言うたらそんなもんだよなあ」

特別にもいろいろな意味がある。大切な人からの贈り物、思い出深い物、自分の成果、証明等……

終夜のペンダントはこのどれにも属さない。実際は属しているかも

しれなくても記憶になればそれは属していないのと同義だ。
だから創造ができなくても仕方がない……。終夜はそう思っ
ていた。

「次の生徒」

合同と言っても、クラスごとに分かれてそれぞれ試験が行われる。
それでもすべてオープンな状態なため、試験中の様子が誰でも確認
できるようになっているものだから終夜は困っていた。
創造ができないことをバカにされるのが慣れていると言っても、ほ
ぼ全クラスの生徒の前でやるものだから気が進まない。

「覚悟決めたか？」

「覚悟もなにも逃げられないだろ」

「とりあえずどんなにシヨボくても成功させる。シヨボイだけなら
他にもいるだろ」

湊の言うことには一理あるが、名門とも言われるこの学院内での創
造がシヨボイのレベルはたかが知れている。

「ま、バカにされる内容が『できない』から『シヨボイ』に変わる
ただけだな」

そう言う終夜の口調はふざけているだけ。終夜は創造ができないと
いうことをネガティブに考えているわけではない。これが自分の一
部だと受け入れている。

ただそれでも人前でやるのとはまた別の話になる。

「次！」

「ほら、次は湊の番だぞ」

「んじゃ、行ってくる」

湊が指揮棒片手に前に出る。他の人は一回一呼吸おいて創造を行っていたが、湊はまるで一呼吸おくかのように慣れた感じで創造を行った。

今回の課題は自分の属性の玉を出して飛ばすこと。

属性というのは火、水、風、雷、土の五つの属性のことだ。五大元素と呼ばれる火、水、風、雷、土で、火を使える人は水が使いにくい。風を使える人は雷が使いにくいという決まりがある。これはウイザード級の人間も例外ではない。

他に光と闇という属性があるのだが、使える人が本当にいるのかどうかわからない不確定な属性だと言われている。

「ほいつ」

湊が出したのは直径30cmほどの風玉だった。大きさとしては他の人と比べたらいして大きくない。他の人は派手さにこだわってやたらと大きな玉を出していた。

だが終夜には分かる。湊の風玉は他の人よりかなり密度が濃いことに。あの風玉を学院に放つたら、簡単に貫通することだろう。

湊は出した風玉を真上に放って破裂させた。そのまま、湊は終夜の元に戻る。

「ただいま」

「お疲れさん。にしてももつと派手にできただろうに相変わらずだな」

湊の実力ならあの質量でももつと大きくできる。いくら密度を濃くしたところで試験官が気付かなければ意味がない。

「お前こそその洞察力はたいしたもんだよ。と言っても俺と同じく他者には分からないことだけだな」

「まったくだ」

2人が話している間にも次々と試験は進んでいく。

「次！」

次の生徒は二人同時だった。

「今度は二人同時？どういうことだ」

2人は目を瞑って手を繋ぐ。

少しして直径1mほどの水玉が具現化された。

「あれってどういうことだ？」

「見たところ手には何も持っていない。何かを身に着けているふうでもないし、にわかには信じられないけど、お互いが媒体なんじゃないか？」

「確かにそうかもな。実は目立たないものが媒体って可能性もある

けど、2人で出る理由の説明にはならないからな」

「それより、少し様子がおかしくないか？」

2人が出した水玉が誰もが見て分かるほど不安定になり始めた。

「長髪の子が苦しそうにしているな」

こちら誰も分かるほど明らかに体調に異変が起きていた。

長髪の子の体調に呼応しているかのように、水玉がグニャグニャになっっている。

やがて長髪の子が膝から崩れ落ちた。それに続いて水玉を崩れ落ちる。

「大丈夫か？」

気を失うほどではなかったみたいで、相方の肩を借りてフラフラながらも元の位置に戻っていく。

「人の心配している余裕はお前にはないはずだぞ」

「え？」

「次、お前だろ」

湊の言葉で前を見ると、試験官……以外にもクラスの大半が終夜を睨んでいた。

「……行ってくる」

終夜が前に出ると、終夜のクラスの間が途端に静まった。まるで皆で申し合わせていたかのようだった。よく見ると何人がニヤニヤしている。

「ふう」

終夜はペンダントを強く握りしめる。

創造するには、まず自分の想像の世界を展開しなければならない。このフィールドのことをIF（Imagination field）と言う。もともとIF、もしもの世界が現実になればいいなということでの名称らしい。

自分を中心に他者には見えないフィールドを展開する。この中は自分の脳と同じで、強く想像したことをこのフィールド内に具現化させる。

そして火の玉等を具現化してフィールド外に出しても消えることはない。フィールド内では具現化はできないが、一度具現化したそれは現実存在する「もの」となるからだ。

終夜はフィールドを展開するが直径2？ほどの小さな火の玉しか出せなかった。しかも出してすぐにポンツと間抜けな音をたてて消滅した。

「あははははっ」

何人かの生徒が一斉に笑い出す。終夜はそれらを無視して湊の元へ戻った。

「ちゃんとできたじゃないか」

「そりゃどうも」

誤解されがちだが、湊は決して終夜をバカにしているわけではない。創造ができるできないで人を区別しないだけだ。

確かに昔は勉強ができないからといって孤立していたわけではない。それなのになぜ自分には友人ができないのか終夜は不思議だった。

「これで試験は終了だ。各自教室に戻るように」

未だに笑いが絶えない中、終夜と湊も教室に向かう。途中でからかってくる生徒が現れたが、もちろん終夜は軽くスルーした。

「そういえばさっきの生徒はどうなっただろうか？」

「さっき普通にみんなと一緒に戻ってるところを見たぞ」

湊の疑問に終夜が答える。

「よく見てるなあ」

2人が教室に入ると、すぐにいつもの生徒が絡んできた。

「お、できそこないが帰ってきたぞ」

「あの間抜けな音はなんだ？やろうと思ってできる音じゃねえな」

「それってある意味すごいってことじゃね」

「それもそうだな。よかったじゃねえか、お前にもすごいことができて」

「（こいつらも飽きないなあ）」

「そういうのやめてください」

喧噪の中、一人の女の子の声が響く。

それは先ほど体調を崩した長髪の女生徒だった。

「そうやってバカにするのってよくないと思います。私だって不安定な創造で体調崩しちゃったですし……バカにするなら私にもしてください」

皆呆氣にとられる。

一見おとなしそうな女の子が、真剣に今日会ったばかりの男子生徒を庇う姿に圧倒されていた。

「いや、俺は別にかまわないから……」

庇ってくれるのは嬉しい。

だけど、どこか気恥ずかしいものがあつた、が……

「よくありませんっ」

一蹴された。

「……………」

「まあ終夜、ここは素直に喜べ」

嬉しいことは嬉しかったのだが、妙な気持ちだった。

「ちっ、なんだよ」

「いい子ぶりやがって」

男たちは悪態をつきながら教室を出ていく。

教室内は再び静寂に満ちた。

「あ、あのっ」

最初に口を開いたのは女生徒だった。

「ご迷惑……でしたか？でも同情とかじゃありませんっ。私も同じですから……」

終夜は最初からこの女生徒が同情で庇ったなどと思ってはいない。ただ、突然すぎて何を口にしたらいいか迷っていただけだった。

「そんなこと思ってないよ。むしろお礼を言いたいぐらいだ」

「よかった……あ、私は小鳥遊希たかなしめぐみです」

「ボクは小鳥遊望たかなしのぞみだよ。ボクたちは見ての通り双子だから」

ずっと相方のそばで様子を見ていた少しボサツとした短髪で活発そうな女生徒も自己紹介をする。特徴と言えは着ている服の袖が少し長いところだろうか。

見ての通り、と言っているけど誰が見ても2人が似ているとは思えなかった。

「あ、ああ。俺は不動終夜。こいつは・・・」

「月城湊だ」

「よろしくね。あ、ボクたちのことは名前で呼んでね。同じ苗字ですから」

さん付けにしようと思ったのだが、呼び捨てでかまわないと言ってくれたため、呼び捨てにすることに。

同年代の女の子を呼び捨てにすることが初めてな終夜は、内心少しドキドキだった。

「実は・・・私たちはお互いが媒体なんです」

言いにくそうに告白する希に終夜はやっぱりとつぶやいた。

「気づいていたんですか？」

終夜としてはあれを見てその可能性を考えないほうがおかしい思っていたのだが、希は気づいたことが意外だったようだ。

「今まで私たちがお互いが媒体だって言っても、誰も信じてくれなかったんです。精神的にお互いがいなきや駄目な性格なんだろうって」

人間が媒体だって話は聞いたことがない。そう思う人が多くても不思議ではなかった。

「でも、皆がそう思う理由は私のせいなんですけど・・・」

先ほどの試験の時、創造をした途端希の体調が悪くなったところを
思い出す。

媒体が合わなくて体調が悪くなるという話は聞いたことがないが、
失敗する理由が媒体にあるというのは別段おかしくない。

そんなことを考えながらも、暗い雰囲気が苦手な朝也は話題を変え
ることにした。

「それよりそろそろ帰らない？HRホームルームがないみたいだから、一緒に帰
ろう」

終夜にとって女の子と一緒に下校するということが初めてだったか
ら、勇気のいるセリフだった。

「はい」

終夜が気を遣ってくれたことに気づいた希は、笑顔で返事をした。

第一話 憂鬱な実技試験（後書き）

終夜の性格の違い等で若干違和感があるかもしれませんが、これからもうよろしくお願い致します。

第二話 出会い

「ここどこだよ・・・」

終夜は一人、暗い洞窟の中を歩いていた。

上がどこまで続いているのか分からないほど暗く、自分の足元すら見えない状況。

創造で明るく照らすことなんてできるわけもなく、間隔と手探りで進んでいた。

「知らない洞窟で道に迷うとかヤバいな、この状況」

こんなところを彷徨う羽目になったのには、もちろん理由がある。それは終夜の休日の日課、具現化の練習中に起きた出来事だった。

「はあ、はあ」

いつも終夜は自分の限界まで創造をしていた。

やっていることは、火、水、雷、風、土の属性玉を一通り具現化するだけ。

しかし、どれをやっても上手くいかないのはいつものことだ。

それでもあきらめずにするこの訓練も、全くの無駄というわけではない。

もともと終夜は全く具現化ができなかった。

しかし、先日の試験で証明したように、『全くできない』から『少しできる』へと進歩した。

ここに至るまで一年かかったが、練習すれば進歩できるというのが

証明できたからこそ今もこうして続けていられるのだ。

「ラスト」

自分の限界が訪れたと思ったときに、最後の一回と無理やり創造をする。

これはたまたま漫画で見た知識だったのだが、なんとなく上達している気がして毎日続けていた。

ちなみに内容は『己の限界に達した時からが修行の始まり』といった暑苦しい内容だったのだが、中学二年であつた終夜には強く心に響いた。

そのため、これもいつものことだったのだが、事件はこの時起きた。最後に火の玉を出そうと集中し始めたとき、耳がマヒするほどの大きな音が鳴った。

学校でマイクを使用しているときにたまに鳴るあれだ。それがまるで終夜の耳元で鳴っているかのように響いたのだ。

限界ギリギリだった終夜は、この音で集中力を欠いてしまった結果、創造した火の玉を暴発させてしまったのだ。

とつさに火の玉を自分から切り離して後ろに下がったから直撃はしなかったものの、一度具現化した火の玉は消えずに地面に当たって大爆発を起こした。

「うおっ」

地面が薄かったのからか大きな穴をあけてしまい、近くにいた終夜はその穴に落ちてしまった。

「ちよっ、深っ、これマジ死ぬって」

意外なほど深かった穴にどんどん落ちていく。

終夜の頭には着地した時、自分がグロテスクな状態になって地面に突っ伏している光景が浮かんできた。

慌てて壁に手をつけて勢いを殺そうと試みる。

爪が削れ、皮膚を傷つけながらも勢いはほんのわずかしき落ちない。やがて地面が見えてきて、慌てて風玉を創造した。

自分の未熟さと疲れで、かなり小さな風玉だったが、質がよかったのか死なずに着地することができた。

「・・・・・・・・」

無我夢中で創造した結果、今までに類を見ないほど質がいい創造ができて心臓がバクバクだ。

喜びの興奮より死に直面した動悸なのかもしれないが・・・

「こりゃあ上に登るのは勘弁だな」

壁がゴツゴツとしているから頑張れば登れなくもなさそうだけど、しくじれば今度こそグロテスク確実だ。

疲れが限界に達している終夜にはきつい作業になる。

終夜はすぐにその案を切り捨て、道が続いているのを確認して先に進むことにした。

先ほどと違い、地上の光が届かないので足元が見えないほど暗い。

なんとか自分の感覚を頼りに、壁に手をつきながらゆっくりと進む。

「コウモリとか出ないでくれよ」

独り言でもしていないとやっていられない状況だった。

別に終夜は暗いのが怖いわけではない。

幽霊が出そうとかで恐れているのではなく、本当にコウモリや蛇なんかが出てくるかもしれないということに恐怖していた。

「光・・・・・・・・」

どれだけ歩いたか分からない。

終夜の体感では一時間は歩いていた気分だった。

やがて目の前に光が差し込み、まず自分の足元と後ろを確認して変なものがついてきていないか確認する。

「よしっ」

そして光の元へ素早く走り出す。

光の正体は太陽・・・ではなく、ネオンの光だった。

そして中央には鎖によって礫にされた女の子が眠っている。

周りには何もない。

女の子の周りに、四つのネオンが光る柱があるだけだ。

幼い顔立ちをした背の低い女の子。

礫の状態とのギャップに終夜が感じたのは当惑や興奮ではなく、疑

問だった。

なぜ礫にされているのか、という疑問ももちろんあったが、こんな地下に長い間礫にされていてなぜ衰弱していないのか。

この状況は現実的に考えてありえない状況。

鎖と柱には大量の埃が溜まっている。

終夜は女の子に近づき、呼吸と脈を確認したが、どちらも止まっていた。

しかし放っておけるわけもなく、どうやって鎖を外そうかと朝也は思案する。

試しにどのくらい鎖を動かせるかと鎖に触れてみた・・・・・・・・瞬間に鎖が消滅した。

終夜が触れたところからジワジワと消滅していく。

「おっと」

支えを失った女の子が崩れ落ちるのを終夜が受け止める。

「つて、裸あ!？」

鎖で隠れていたから露出が多いぐらいにしか思っていなかったが、受け止めた少女は何も身に着けてはいなかった。

慌てて自分が着ていたパーカーを脱いで少女にかける。

すべすべで柔らかい肌。幼い顔立ちをしているが、きちんと女の子の身体をしていた。

「これって死体………なのかなあ」

仮死状態に取れなくもないが、それにしては保存が雑だ。

かといってこんなきれいな体を死体と呼ぶのも不自然な気がした。

「パチッ」

「うおおっ」

死体だと思っていた少女が、目の開く「パチッ」という擬態語を発しながら目を開ける。

さり気なく脈を確認してみると、きちんと生存していることが確認できた。

終夜はそのままゆっくりと少女を下ろす。

「……いろいろ聞きたいことがあるけど、まずはここから出ないか？」

終夜は冷静だった……わけではない。
鎖が消滅すると同時に、ネオンの光も徐々に消えてしまったので、
再び何が出るか分からない恐怖に陥ったのだ。

「……うん」

答えながら少女は終夜の裾をちょこんと掴む。

「怖いのか？」

「………うん」

「俺も怖い」

お互いを感じている恐怖は違うものの、少し情けなかったかと終夜は後悔する。でも怖いものは怖い。

終夜は少女が寒そうにしている様子を見て、先へ進むことを急いだ。
決して怖かったからではない。

暗い道を歩いている間、気を紛らわせるために少女に話しかけたが、
少女が口を開く気配はない。

怖くてそれどころではないのだらうと終夜は思っ、会話を諦める。
道がだんだん上を向き、終夜が落ちた分を登っている感じがしていた。

そして道が険しくなるにつれて少女の歩くペースが悪くなっていく。

「ほら」

終夜は腰を下ろして背中を開ける。

「………?」

「足つらいだろ？おぶってやるから遠慮せずに乗りな」

少女は一瞬考える素振りを見せたが、やがて無言で終夜の背中に体を預けた。

「（軽っ）」

人間の体はこんなにも軽いのかと疑うほどにその少女は軽かった。

「（そして柔らかっ）」

少女は衣服をまったく身に着けていない。終夜の上着を肩からかけているだけだ。

少女の肌と朝也の手がダイレクトに触れ、僅かながらの胸もほぼダイレクトに背中に伝わっている。

先ほども少し触ったがあの時とは違い、人間の体温を強く感じる。

「・・・・・・？」

「なんでもないですよ？」

疑問に疑問で返してさらに疑問に思う少女を無視して終夜は歩を早めた。

少女は恐怖で終夜にしっかりと抱きついていていため、終夜のドキドキは止まらない。

「（これが吊り橋効果ってやつか）」

終夜はテンパってわけの分らない、間違ったことを考えてしまう。

単に女の子に対しての免疫が極端にないだけだ。

「・・・光」

少女のつぶやきに終夜は正気に戻って、光に向かって一目散に走りだす。

今は暗いところから抜け出したいという気持ちを忘れて、少女を早く下ろしたいという気持ちでいっぱいだった。

「・・・眩しい」

今度は太陽の光だった。

女の子は眩しさで終夜の背中に顔を押し付ける。

この子にとって太陽の光は何年ぶりだったのだろうと考えたところで、気づいた。

「（この子どうしよう・・・）」

洞窟を抜けだしたからといってこのままにしておくわけにはいかない。

長い間洞窟の中に縛られたぐらいだから家や家族なんかがあるわけがない。

だからといって事情を説明して保護してもらうことも難しいだろう。

「一緒に来るか？」

結局この答えに辿り着いた。

見ず知らずの女の子を家に連れ込む。

普通はありえないが、いろいろとパニックになっていた終夜にはこれ以外考え付かなかった。

「（コクリ）」

背中であなずく気配を感じて、そのままの状態で家に送ることにした。

自分の背中で少しでも女の子の裸体を隠すためだ。

「（でもこれって端から見たら犯罪に見えるような気がする）」

家に着くころには冷静になっていた終夜が、女の子を家に入れるときにやっと気づいたことだった。

「とりあえず俺のＴシャツとジーパン・・・・・・・・・・はベルトをつけても落ちるからそれで我慢してくれ」

少女はコクリとうなずく。

こうしてよく見てみると幼いながらも、すごく整った顔立ちをしていた。

幼さが強調されてかわいらしいという形容詞がよく似合う。

先ほどの柔らかい肌を思い出した終夜は、慌ててそれを振り払って本題に進む。

「俺は不動終夜。君は？」

完全に冷静に戻った終夜はまず服を与えて自己紹介を始めた。

終夜は過去に振り返ることはしない。

どんな結果であれ、それを受け止めて次に最善の方法を考えることにしていた。

「・・・綾音は綾音^{あやね}」

ちよこんと座っている綾音と名乗る女の子がおどおどしながらも自己紹介をした。

「んじゃ綾音。綾音はなんであそこにいたのか分かるか？」

「（フルフル）」

首を横に振る綾音。

「創造って知ってるか？何でもいいから創造してみて」

記憶消失の時は創造ができるかどうかをまず確認する。

創造ができれば生活にはまず困らない。

だが創造ができないほどとなると、かなりの重症ということになる。

「ん」

目を瞑って一生懸命に唸りだす。

「それ、たぶん想像」

「ん？」

「はあ」

お約束のボケに軽くため息をつく。

今のご時世、創造ができないどころか知らないなんてのはかなりキ

ツイ。

しかし、それ以上に終夜は疑問だった。

「綾音はいつたいつからあそこにいたんだ？」

創造が一般に広まったのは約100年前。それ以前の人間に創造は使えない。

実際にまだ100を超える人間が少数ながらも存在しているため、創造が使えない人間というのがしつかりと確認されている。

あの保存の仕方では仮死状態だったとは考えられないし、綾音が100を過ぎているとは考えにくい。

記憶消失なら創造ができなくても不思議ではないが、見つけたときの状況から考えて、単なる記憶喪失で片付けられる問題ではないと終夜は考えた。

「（固定・・・か）」

土属性の固定を使えば、生きたまま、そのままにしておくことが可能だ。

もつとも、理論的には可能だが、いろいろな問題により現実になんかなことはありえない。

「あ・・・」

突然綾音が何かを思い出したように声を出す。

「何？」

「綾音はロボットなの」

「・・・・・・・・」

他の可能性と比べたらロボットというのが一番有力な気がする。

「まあロボットでいいや。じゃあご飯とかいらない？」

「ご飯は・・・・・・・・ほしい」

グウーっとお腹の鳴る音が響く。

「とりあえず昼にしようか」

ツッコみはしない。

何も知らない綾音にこれ以上聞くことを諦めただけだった。

「うん」

綾音はパアツと明るい顔になってうなづく。

「じゃあちよつと待っててくれ」

両親共に常に外出しているので終夜は一人暮らしをしている。
なので料理はお手の物だ。

「早く食べたいだろうから簡単に野菜炒めでいいな」

「あ・・・・・・・・」

綾音が何か言いたそうにするが、火の音で終夜の耳には届かない。

「ふんふんふん」

ノリノリで料理をする終夜の傍らで落ち込んでいる綾音。
その意味を終夜は食事中に知ることになった。

「・・・人参とピーマン・・・嫌い」

「・・・ロボット・・・だよね？」

「・・・人参とピーマン・・・嫌い」

そろそろ自分の人参とピーマンを終夜のお皿にうつす。

「好き嫌いはいけません」

「あう」

「ほら、キャベツと一緒に食べれば味なんて気にならないから」

「あむ・・・・・・うゝ」

「よく食べたな」

よしよしと頭を撫でると綾音は嬉しそうにしてみう一口パクツと食べた。

「うゝ」

「はは」

苦い顔をしながら頑張つて食べるたびに終夜は綾音の頭を撫でる。
その姿はまるで、妹に対する優しい兄のようだった。

「く」

食事を終えて終夜が食器を洗っている間に、綾音は静かな寝息を立てて寝てしまった。

「さて、綾音はもう家に置いとくしか選択肢はないな。肝心の服の・
・特に下着の調達なんだが・・・・」

終夜の隣で寝ている綾音をちらつと見る。

綾音よりはるかに大きなＴシャツを着ているためギリギリ下まで隠れてはいるが、きわどかった。

さあどうしようかと考えたところで、終夜に名案が浮ぶ。

「小学校以来湊以外で初めて友達ができたんだ。こういう時相談しないとな」

終夜は携帯を取り出して希の番号を表示させる。

初めて会った日の帰りにメアドを交換していたのだ。

もっとも終夜が積極的に申し出たのではなく、湊が気を遣ってくれたのだが。

女の子のことは女の子に聞いたほうがいいに決まっているとさっそく電話を鳴らした。

「（いやまて、なんて聞けばいいんだ？）」

鳴らし始めたところで極めて繊細だろう問題に気づく。

『はい小鳥遊ですが、不動さん？』

「（なんて言うべきか……………）」

『不動さん？』

着信の時の画面で終夜だと分かっているのだろうが、終夜の返事がないため自信なさげな声だ。

そもそもかかってきた電話に出て反応がなければ怖くなるのが普通だ。

そのことに気づいた終夜は慌てて口を開いた。

「あ、ああ、すまない。ちょっと相談があるんだけど……………」

『はい。私でよければ相談に乗りますよ？何でも言うてください』

「ええと……………」

朝也は必死に考えた。

しかし心配そうに聞く希に急かされるように、思っていたことをそのまま口に出してしまった。

「女性用の下着がほしいんだけど……………買いつらいんだよね」

『え、ええと……………』

「（アウトー！ー！）」

何でも言ってくださいと言ってくれたが、これは希が予想していた内容を遙かに超えていたことだろう。

希ができる範囲を超えている。

下手すれば希の下着をくれと言っているようなものだった。

だが希はどうオブラートに包んで言っべきか迷っているのか、言葉を探していた。

明らかに不審な終夜に対して、思ったことをそのまま言葉に出さないあたり、希の性格の良さがうかがえる。

「・・・すまない。事情をきちんとさせてくれる時間を与えてくれればうれしい」

自分があまりにも恐ろしいことを言ったことに気づいて冷静になる。今鏡で自分の顔を見たら絶対に真っ青だよな、と思うほど血の気が引いていた。

『は、はい』

別に隠すことではないので綾音のことを出会いから含めてすべて説明する。

次第に安心していく希の声を聞いて、終夜も心の底から安堵した。

『そういうことですか。安心しました』

本当に安心しているのだろう。

高校最初の友人が、女性用の下着を求める変態だというのは避けたところだ。

「（希が理解ある人でよかったあ）」

相談相手を望にしていたら大変だっただろうと、終夜は自分の判断を喜んだ。

『それなら私が適当に買ってきて不動さんの家に持っていきますよ。綾音ちゃんを連れて買いたい物はないようですから』

「本当か！なんだか悪い気がするけど他に方法がないから頼んでいいかな？」

『遠慮しないでください。では簡単にサイズを今測ってもらえますか？』

また無茶難題を、と思ったが、自分で買うことを考えたら安いものだと思い改めた。

「・・・分かった。たぶんちょっと時間かかると思うからまたかけなおす」

「分かりました。急がなくても大丈夫ですから」

希の気遣いに、本当にいい友達を持ったと感動しながら電話を切る。未だにかわいい寝息を立てている綾音を見ながらこれからのことを考えて、終夜は先ほどの自分の決断を少し後悔した。

第二話 出会い（後書き）

前作を見ていただいていた方のみには報告です。名前を綾香から綾音に変更しました。理由は一人称が綾香より綾音のほうがしっくりきたからです。

第三話 綾音のサイズ

終夜の目の前には静かな寝息を立てている綾音の姿がある。

これからのことを考えながら、起こしたほうがいいのかどうか迷っていた。

だが、綾音はいわば無垢なる子ども。

これから終夜が綾音に対してすることを想像すると、間違った知識を与えかねなかった。

「しょうがない。こつそり・・・いやこれだとやましいことをするみたいだな。さっさと済ましてしまおう」

希に下着を含めた衣類を購入してもらうのに、サイズを測る必要があった。

終夜は女性が服を購入するとき、どの程度サイズを気にするのか分からない。

終夜自身は服もパンツも袖と裾の長さだけ合えばよかっただけだし、下着なんてS・M・Lぐらいしか考えたことがない。

希にわざわざ頼むのだから中途半端なことはしたくなかったため、希が買う時に困らないようにできる限りのことは調べるつもりだったのだが・・・

「まずは腕と足の長さだな」

本来なら試着して買うものなので、今回はこれぐらいはしないとならない。

終夜はメジャーとメモを手には寝ている綾音に近づいた。

「改めて近くで見ても、やっぱり小さいなあ」

冷静に綾音を観察するのは今が初めてだ。

最初から小さい子だとは分かっていたのだが、細くて華奢だった。

「よし。あ、靴も必要だから足のサイズだな」

足囲そくいと足長そくちようを測る。

終夜が足に触れたとき、綾音が少し身じろぎした。

起こしてしまったか、と一瞬不安になったが、むにやむにやしただけで眠り続けてくれた。

「そういえば赤ちゃんはほっぺに刺激がくると、その方向に口を近づけるといふのを聞いたことがあるな」

綾音の寝ている姿が赤ちゃんの姿がかぶったため、終夜は興味本位に綾音の頬をつつついてみた。

「んっ」

綾音は少し身じろぎしただけ。

終夜はその反応がおもしろくて何度も続ける。

「んんっ・・・・・・・・・・あむっ」

数回では赤ちゃんのように口を近づけなかった綾音だったが、何回も続けているうちに、いきなり終夜の指を咥えてしまった。

歯ぐきはぐきが気に入ったのか、そのまま指を甘噛みする。

終夜は綾音の口の中の温かさに動揺しつつも、慌てて指を引き抜いた。

「赤ちゃんみたいだからこそ困りものだな」

様子が赤ん坊に似てても、実際見た目は終夜と年がそんなに離れていない。

「それより次が最後だな。これが難関なんだが」

いくら小さいとはいえ、綾音は正真正銘女の子だ。ロボットかもしれないけど女の子には違いない。

「どう見てもBはないな。AとA Aの違いがよく分からないから一応きちんと調べないとだめだよなあ」

女の子にブラは必須だ。

たとえわずかでも膨らみがある以上、きちんとつけていないと将来型崩れ（型崩れするほど成長するかはともかく）する可能性があるし、そもそも乳首は胸の大きさに関係ない。

「確かアンダーとトップの差で決まるんだっけか」

終夜は昔、カップの決め方は揉み心地で決めるものだと思っていた。漫画等でブラを買いに来たお姉さんが、店員に胸を揉まれている（実際には寄せてたりしていて、決して変な意味ではないのだが）のを見て、実際に触ることが前提だと思っていた。

「昔の知識のままだったら大変なことになってたな」

終夜は起こさないように綾音の体を起こして自分の体にもたれさせる。

服の上からでもいいのだろうかと一瞬思ったが、これを脱がしたら

スッポンポンだったと思い出してそのまま測ることにした。

「ん、んっ」

先ほど頬を突つついたときよりも悩ましい声をあげる綾音。敏感な部分が擦れているのだからこの反応は仕方ない。

「端から見たら完全にアウトだな。それ以前に俺もアウトだ」

どのくらいきつく締めて測ればいいのかと四苦八苦しているとふと違和感が。

「・・・・・・・・」

綾音の目が開いていた。

目を開きながら寝ているのではないとしたら、起きているのだろう。その目は微妙に寝ぼけていたが、目覚めているのには変わらない。

「・・・・おはよう」

それは悩んだ末に終夜が選んだ言葉だった。

「ん、おはよう・・・・・・・・なにしてるの？」

至極もつともな疑問である。

「あ、綾音も女の子なんだなあ」

意味が分からなかった。

それに対して綾音の答えは。

「違う、綾音はロボット」

「そ、そうだったな」

どうやら綾音にとって、自分がロボットというのは重要らしい。そのまま微妙な空気の中、なんとか終夜は綾音のアンダーとトップを測り終えた。

綾音は微妙に寝ぼけていたのか、悩ましい声をあげるだけで、特に終夜に問いただすことはしなかった。

「…………ギリギリだな」

「なにが？」

「いや、なんでもない」

綾音の名誉のためにここは黙っておこうと終夜ははぐらかす。もつとも、この無垢な瞳の持ち主にその必要はなかったのかもしれない。

「ああ、よろしく。じゃあまた後で」

『はい』

なんとかかすべて測り終えた終夜は希に自分の成果を告げて電話を切った。

難関を突破できて一安心する。

「とりあえず掃除しよう」

頻繁に掃除をしているから汚れていないはずだが、女の子を家に呼ぶということで少し神経質になる終夜は、掃除機を取り出してスイツチを入れた。

ブオオオン

「それはなに？」

綾音は物珍しそうな顔で掃除機を指さす。

「これは掃除機って言って、床をきれいにするための道具だよ」

終夜は、綾音が本当に何も知らないんだということを改めて実感しながら説明する。

「やってみるか？」

「うん」

綾音に掃除機を渡すと、綾音はさっそくボタンを押した。だが、急に音がなって驚いたのか、掃除機を落としてしまう。

「・・・・・・・・」

落とした掃除機を見下ろしたまま、綾音は拾わない。

「どうした？」

「・・・重い」

終夜は綾音の体重がものすごく軽かったことを思い出しながら、わなわな震えている細腕を見て妙に納得してしまった。

「OK。無理は禁物だ」

綾音を隅に移動させて掃除を再開する。

一通り掃除をし終えた（窓ふき等も含めて）いいタイミングでチャイムが鳴る。

「はいはい」

扉を開けると私服姿の希と望が立っていた。片手には大きな買い物袋を持っている。

「ごめんなさい。望も行くってきかなくて」

「全然かまわないよ。さあ入って入って」

「おじゃまします」

「おじゃましまーす」

終夜は大きな買い物袋を希から受け取って、2人をリビングのある、二階に案内する。

希はカーディガンにロングスカートといったシンプルでおとなし目

の服装。

望は短いスカートにYシャツの上にカーディガンといった、ちょっとボーイッシュな感じた。ただし制服と同じで袖が少し長い。2人の雰囲気そのまま服装に現れていた。

「綾音ちゃんこんにちは」

小鳥遊姉妹を警戒して終夜の後ろに隠れている綾音に、希は少し膝を落として同じ目線で挨拶をする。

「・・・こんにちは」

「私は小鳥遊希と言います。よろしくね」

「ボクは望だよ。よろしくー」

「・・・よろしく」

終夜の後ろに隠れながらも顔を出して挨拶を完了させる。

「じゃあさっそくいろいろとお洋服を買ってきたから着替えましょう」

「さあ不動君は外に出た出た」

男の終夜がこの場にいるわけにはいかない。

終夜の家の二階には、階段を昇ってすぐのところにリビングが眼に入る。

そのため廊下がないので、近くの部屋に入る。

『下着もいくつか買ってきたから好きなのを穿いてね』

『あ、それボクとお揃いだよ』

『とりあえず今日はこのお洋服を着てください』

『お姉ちゃんったら初めて男の人の家に行くからって、自分の服選
びに時間がかかったよね』

『ちよつと望』

『ホントのことですよ』

『あ、あれは今日の気温が微妙だったからどのくらい着込むべきか
悩んでいただけです』

「………なんか悪い気がしてきた」

男が同じ部屋にいないというだけでなんという乙女ワールド。
聞き耳を立てていたつもりではないけど、同じ部屋にいないという
のに終夜は居たたまれない気分だった。

この場からもう少し離れるべきかと悩んでいたところに、目の前の
扉がカチャリと音を立てて開いた。

「……終夜………」

綾音が顔だけを出して終夜を呼ぶ。
入ってもいいという意味なのだろう。

「やっと終わったか」

「・・・・・・・・・・？」

「なんでもないよ」

終夜は部屋に入って改めて綾音を見る。

綾音袖にフリルがついたピンクのかわいらしいワンピースを着ていた。

「パジャマとかもついでに買ってきました」

やけに大きな紙袋だなと思っていたら生活に必要な服を一通り買ってきてくれたみたいだった。

「それより綾音ちゃんの恰好見て不動君は何か感想ないの？」

「ん？ああ、希はセンスあるな」

「あ、ありがとうございます」

「・・・・・・・・そっち？」

望は何か言いたそうにして諦める。

終夜は希にお金を渡して再度お礼を言った。

「気にしないでください。そろそろ私たちはお暇しますね」

「ろくにお礼もできなくてごめんね」

「もう、そういうことは言わないの。こういっのはお互い様でしょ」

「（なんていい子なんだ）」

終夜は心の中で激しく感動しながら玄関まで二人を見送る。

「今日はいろいろとありがとう」

「……………ありがとう」

「じゃあまた明日ね、不動君、綾音ちゃん」

「ばいばーい」

「ああ、また明日」

お邪魔しました、と2人は不動家を後にした。

「……………ふう」

下着を含めた服という難関を突破したとはいえ、まだまだ問題は山積みだ。

さあこれから綾音をどうしようかと頭を悩ませる終夜だった。

第四話 新しいクラス

「俺は今から学校に行ってくるからきちんと留守番をしていてくれよ」

終夜が綾音と出会った翌日。

終夜は学園に行く前に綾音にきつく念を押しておく。

「学校？」

どうやら綾音は学校も知らないらしい。

昨日からいろいろと話していて分かったことだが、綾音には常識的な知識が欠けている。

さらには箸の持ち方も知らないほど生活知識もなかった。

それなのにロボットという存在を知っているのが不思議だったのだが、本人もよく分からないらしい。

「とにかくお昼はラップしてあるから電子レンジでチンして食べてくれ」

「電子レンジ・・・？」

「昨日教えただろ」

終夜は昨日のうちに家で留守番をするのに必要な知識を教えていた。その中に電子レンジの使い方を教えていたのだが・・・

「あ・・・あれ？」

綾音が思い出したというふうに指を指す。

指を指さした先にあつたのはトースターだった。

「……………もう一度最初から説明するよ」

「ギリギリセーフ」

終夜はチャイムが鳴り終わると同時に教室に滑り込む。

今日は先日の実技の結果でクラス分けが行われていた。

入学式の時は仮であつて、本決まりではなかった。

掲示板から自分の名前を探していたら、ギリギリになってしまったのだ。

しかし、遅くなった一番の原因は他にあつた。

「まさか電子レンジからあそこまで苦勞するとは思わなかった」

不動産の電子レンジの使い方は、温めたいものを入れて「温めスタート」というボタンを押すだけで済むものだ。

もちろんものによって設定が変更できるため他にもボタンやダイヤルはあるのだが、たいていはこのボタン一つで済む。

しかし、綾音はそれが気に入らなかつたらしい。

「もっとボタンを押したい」

こんなことを言い出した。

「電子レンジを触ったこともないやつが変な欲を言うんじゃない」

「でも……………」

「でもない。とにかく俺はそろそろ行かないと遅刻する。言った通りにやってくれよ」

さあ急ごうと玄関に向かうと、なにやらボタン音が連続で鳴り響いた。

「設定を全部キツイやつにするんじゃない！」

温めの強さが「自動」から「瞬」へ。

温め時間が「自動」から「長」へ変更されていた。

「瞬」はその名の通り一瞬で温めることができる。

創造を利用した画期的なアイデアということで一時期人気が出た電子レンジなのだが、食材によっては燃えてしまい、加減ができないので今では使われていない。

「野菜炒めを燃やす気か!？」

「人参とピーマンは燃えたほうがいい」

「キャベツも燃えんだよ！」

そこから人参とピーマンは食べたくないということで争っていた。昨日は買い物に行けなかったから野菜炒めしか作れなかったのだ。夜はカップ麺で過ごしたが、綾音にお湯を温めるなんてことができないわけではない。

「はあ〜」

朝の出来事を思い出してまた心配になる。
帰宅したら火事になってたなんて洒落にならない。

「おはよう不動君」

「おはようございます」

やっぱり今日は家に帰ろうかと、変に気が変わりかけている中に小鳥遊姉妹が話しかけてきた。
どうやら同じクラスになったようだ。

「ああ、おはよう」

学校で女の子に朝の挨拶をするなんて何年ぶりだろうかと終夜は少し感動する。

「綾音ちゃんのこと？」

終夜が遅くなった理由を察して声をひそめて希が聞いてくる。

「まあね」

朝の出来事を説明すると、何と言ったらいいか分からないといった表情になる。

「た、たいへんね」

「家が火事になる大変だけは勘弁願いたいものだな。それより先生はまだなの？」

もうそろそろ来てもいい頃なのだが、まだ来ている様子はない。

「案外道に迷ってたりしてな」

とりあえず席につこうかと思ったところに、

知らない男が急に声をかけてきた。

「おっと、いきなりすまん。俺は柊大河だ。ひいらぎたいがよろしく」

中学以来友達というのができなかった終夜は、入学仕立ての人はどうやって友達を作るのだろうと疑問に思っていたのだが、こういうやつから輪を広げていくんだなと妙に納得して自己紹介をしようとする。

「俺は……」

「お前のことは知ってるよ。不動終夜だろ？有名だからな」

その言葉でこいつも馬鹿にしてきたのかと終夜は少し警戒する。

「ああ違う違う。俺はお前をバカにしたりなんかしねえよ。俺もあまり人のこと言えないからな。それに創造ができないことで有名ってことで知っているのは事実だが、俺が興味持ったのはもっと別のことだ」

「別のこと？」

「ああ。お前は入学してからたった二日でこのクラスの美人姉妹と仲良くなった男子生徒だからな」

確かに小鳥遊姉妹はこのクラスの中で一際目立つ。

実は周りの男子がどうにかしてこの2人にお近づきになりたいとあれこれ思案していたところに、終夜がすんなりと話していたものだから、創造ができないのとは違う意味で密かに目立っていた。

ただ、きっかけが終夜の創造ができないといことだったために、さらに反感を買うことになっていたのだが・・・

「ボクたち美人姉妹だって。なんだか照れちゃうな」

「ちょっと恥ずかしいです」

望はどちらかというと美人というより可愛い部類に入るだろう。だがどちらも容姿が整っていて、入学したばかりの男子には話づらいものではあった。

「お二人ともよろしく。それで、興味深いことを話していた気がするんだが・・・」

図々しい性格だなと終夜は大河を評価する。

悪いやつではないだろうけど、興味本位でいろいろと首を突っ込んでそうだ、とあまりいい感情は持てなかった。

内容が内容だからどうはぐらかそうかと思案したところで教室の扉が開いた。

「ごめ〜ん。ここに来る途中で道に迷っちゃって」

終夜にはこの教師の言っている意味が分からなかった。

おそらく終夜以外のこのクラスの生徒全員、意味が分からなかったことだろう。

まさか何気なく言った大河の言葉が当たりだとは思ってもいなかった

た。

そもそも教師が学校内で道に迷う？教師でなくても迷わないだろう。

「皆さん初めまして。私は今日からこのクラスの担任になる水城瑞希です。ちなみに私は創造が全然できませんーん」

すごい高いテンションですすごいダメなことを言う水城先生。

この学園はこのクラスに創造を学ばせることを諦めたのだろうか。

入学式の時は風邪で寝込んでいたらしい。

どこまでもダメな教師だと皆が感想をもつのは仕方がないことだと終夜は思う。

「じゃあホームルームを始めますね」

それから水城先生は何度も躓きながらホームルームを進行させる。本当なら10分とかからずに終わるものを30分もかけて終わらせた。

そのせいか、次の授業の先生の額に青筋が浮かんでいた。

「やっと昼食タイムだー」

4限目の終了を告げる鐘が鳴ると同時に大河が昼食の時間をわざわざ大声で告げる。まだ先生は授業終了の合図をしていない。

「中学生気分が抜けてないやつがいるみたいだが、勉強はきちんとしとけよ」

4限目担当の先生は嫌味を含めた言い方をして退出していく。当然

そんなことに気にした素振りを見せない大河は自前の弁当を鞆から取り出した。

「お前、弁当あるんだな」

大河はたいしたことじゃないと返事をする。

「姉貴が作ってくれるんだよ。自分のを作るついでにつてね」

そう言つて大河は弁当に勢いよくがつつき始めた。
他の人はまだ弁当を出してすらない。

「終夜、飯食べようぜ」

少し終夜とは離れた位置にいた湊が終夜を昼食に誘う。

大河のことには気づいていないようだ。

だが大河は違ったようで、湊に気づくのがつついていた弁当を一旦机に置く。

「お、有名人二号」

どうやら湊のことも知っていたようだ。

「（そういえば湊も一緒にいたからな。でも・・・）」

「終夜どうする？」

大河の声が聞こえなかったのか、湊が再度終夜に問う。

「月城湊だろ？」

「終夜は弁当持ってきたか？」

湊は無視を決め込んだようだ。

「（湊は大河みたいなタイプが嫌いだからなあ）」

以前に湊が言っていた。

俺の嫌いな人間はとにかく図々しいやつだ、と。

大河はそれ以外にも見事に湊が嫌うタイプだったのだ。

「無視かよー」

「月城君、無視しちゃだめだよー」

事情を分かっている望が注意をする。

「そうだそうだ」

だが、大河は調子に乗ってしまった。

それでも望が湊を見つめるので最終的に湊は観念せざるを得なかった。

「なんだ？」

若干声が震えている。

「お、やっと気づいたか」

これは素で言っているのだろうか？と終夜は心配になる。

湊は怒鳴り散らすことをしないタイプだが、それでもこの後どうなるか不安だった。

「・・・・・・・・・・」

「ま、特に話すことはないんだけどな。お前も一緒に飯食おうぜ」

何かが切れる音がしたのは言うまでもないだろう。

それに気づかなかったのは大河だけだ。

その大河がふと思い出したように聞いてきた。

「そっといえばさっきの綾音ちゃんがどうのって話についてけど・
」

「なんのことだ？」

終夜は湊には放課後にでも言うつもりだったのだが大河に言うかどうかは悩んでいた。

しかしこの空気をなんとかするにはちょうどいいかもしれないというのと、どうせ今はぐらかしてもしつこく聞いてくるだろうということでは仕方なく話すことにする。

「・・・・それはまた難しい問題だな」

やはり湊は真剣に事の難しさを感じて親身に考えてくれている。

「でもそれって見ようによっては軽く犯罪じゃね？」

やっと戻りつつあった穏やかな空気を大河が再びぶち壊す。

「状況を考えるに終夜の選択は正しい。そのまま放っておくほうがどうかしていると思うぞ」

「まあそうだけどさ。普通に犯罪だろ。しかも今は一つ屋根の下で2人暮らしたろ？どこのエロゲーだよって感じだよな」

「お前はもう少し言葉を選べ。無神経すぎるぞ。表面の状況だけで判断するな」

湊の言う通りではあったのだが、大河と同じことを一瞬考えた終夜は黙っているしかなかった。

「と、とにかく放課後皆で不動君のお家に行こ、ね？」

場の空気をなんとかしたいと思っての発言だった。

しかし皆で、ということとは大河も含まれている。

それに気づいた湊は当然反論しそうになったが、望の考えに気づいて渋々了承した。

「ん？希少し顔が赤くない？」

終夜が希の異変に気づく。

実は先ほどの大河のエロゲー発言に反応して赤くなったのだが、終夜は気づかない。

「な、なんでもないです」

「体調悪いなら保健室で休んでた方がいいぞ。俺の家に来るのも今日じゃなくていいし」

「なんでもないんですっ」

「そ、そうか」

希の勢いに終夜はたじろぐ。

それでも納得のいかない終夜は、心配で希の顔を覗き込んだが、希は顔を隠してしまった。

「終夜」

「なんだ？」

湊が終夜の肩に手を置いて静かに首を振る。

その顔はどこか呆れていた。

「いらつしゃい」

終夜が家に友達を招き入れたのは、湊を除いたら前回の小鳥遊姉妹が初めてだった。

終夜自身、高校に入学してから数日で大勢招き入れることができるなんて思ってもいなかった。

「けっこう広いんだな」

大河の言う通り、終夜の家は6人が入ってもまだ全然余裕がある。

玄関から入ると、目の前に螺旋の階段が見える。

一階にはトイレ、浴室、洗面所の他に三つの洋室があり、階段を昇ると右にダイニングとキッチン、左にリビングがある。

奥には二つの洋室がある。

「いや、これは広すぎだろ」

「希と望も昨日来たとき、かなり驚いたんじゃないか？」

「え、ええ」

「う、うん」

中学の頃に経験した湊が何気なく聞いたのだが、本人たちはなぜか歯切れの悪い返事をする。

「部屋は余ってるからいつでも泊まりに来ていいよ」

このセリフを言える時がくるとは思わなかった、と内心感動して綾音がいるだろう二階のリビングに案内をする。

「あ、しゅうや」

リビングでテレビを見ていた綾音は終夜に気づくと、とてとてと終夜のもとへ歩いてきた。

終夜は寄ってきた綾音の頭を撫でて、ただいまと言うと、即座に電子レンジを確認した。

「（よし、なんともないな）」

綾音の物覚えはよかった。

ただ天然の部分が物覚えの良さを悪くしていただけだったようだ。

「へえ、けっこうかわいいな」

小鳥遊姉妹の時と同じく、人見知りな綾音は終夜の後ろに隠れる。

「こんにちわ」

希が最初の時と同じように視線を綾音に合わせて挨拶をした。

「……………こんにちわ」

続いて望、湊、大河の順に一通り挨拶をして、綾音は警戒をほんの少しだけ解いた。基本は挨拶から。綾音も挨拶を普通にかわせる相手にはある程度心を許せるようだ。

今日は綾音を紹介することが目的だったので、他愛もない会話を始める。

内容は自然と学校の話になった。

「そういえば知ってるか？鷹左右学園のクラス分けは実力順になっているんだ。Aクラスはもちろんのこと、俺たちEクラスは一番下ってことだな」

「それは知っている。だからなんだ？」

湊は大河に対して微妙に喧嘩腰だ。

しかし、大河の言う鷹左右学園のシステムは、学園の生徒なら誰もが知っていることだった。

「いや本題はここから。どうやら俺らEクラスは問題児扱いされているらしい」

「問題児？ボクたちはまだ問題なんて起こしてないよ」

「いや、この場合の問題児というのは創造のことだろ？」

「その通りだ終夜。創造に関して欠陥がある生徒を集めたクラスがEクラスらしいぞ」

この場合の欠陥とは、単に創造が苦手ということではない。

終夜のように媒体が定まっていなかったり、希と望のようにお互いが媒体で精神的に不安定な人たちのことを指している。

そして、終夜は大河の情報で疑問が一つ解消された。

なぜEクラスは人数が他のクラスと比べて極端に差が出てしまっているのかということだ。

Aクラスを除く他のクラスは平均30人ほど。

Eクラスだけ、わずか10人ほどしかいなかった理由だった。

だがここでまた新たな疑問が浮上する。

名門とも言われている鷹左右学園に、なぜ欠陥を抱えた生徒が10人もいるのかということだ。

「その情報はどこからきたんだ？」

「俺、情報通なんだよ」

納得できる回答ではない。

というか質問に対する答えにはなっていなかった。

「そういえば、柊君の媒体ってなんなの？」

この場で媒体が何か分かっていないのは大河だけだ。

希は望で望は希。終夜はとりあえずペンダントで、湊は指揮棒だ。この四人はたまたま試験の時お互い見ていたから知っていたのだが、大河だけは試験の時を見ていなかった。そのため望の疑問はもつともだったが、普通は媒体のことを人に問うことはしない。

自分の媒体を晒すということは、自分の弱点を晒すのと同義だからだ。

「ん？ああ、俺はこれだよ」

大河は特に気にした様子も見せずにポケットから何かを取り出す。ポケットから出したのはビー玉だった。誰が見ても普通のビー玉だった。

「ビー玉・・・だね？それが一番大切なもの？」

「ほら、子供の時ってなんでもものを集めたがるものだろ。子供の時に姉貴が唯一くれたビー玉が印象強くてな。それからビー玉ばかり集めてたんだよ。ま、それが今も続いてるってことだな。別に今もビー玉大好きってわけじゃないんだけど、なんかこれがしつくりくるんだよ」

「・・・・・・・・」

「皆黙りこくってどうした？」

重度のシスコンだと公言したことに、自覚はないようだ。

大河にとってはビー玉そのものより、姉がくれたという事実がうれしかったのだろう。

子供でそうなるのは分からなくもないが、それが今もなお引きずっ

ているというのは普通はない。
よほど姉が好きでなければ媒体に選ばれるまでにはならないということだ。

「でもそれって不確定媒体だよな？」

「お、よく気づいたな」

不確定媒体……今回のビー玉のようにビー玉ならなんでもいいということだ。例えば湊が愛用している指揮棒は世界中に一個しかない。たとえ名称が同じ指揮棒が存在しても湊とともに歩んだ記憶までは同じではない。

しかし大河の場合、ビー玉ならその辺で売っているものでも何でもいいということだ。

これは一見有利に思えるが、実はそうでもない。

不確定媒体の時は決まって他にもっとしつくりくる媒体があるものだ。

不確定媒体だと50%しか本領を発揮できないと言われている。
なぜこのようなことが起きるのか原因は不明だが、脳が様々な理由で一番大切なものをごまかしているのではないかとされている。

「ま、それ以前に俺は得意な属性が分からないからな。不確定だろうが確定だろうがたいして関係ないよ」

得意な属性が不明というのは珍しいケースだが、50%しか実力が発揮できないのならしつくりくる属性が見つからなくても不思議ではない。

「しゅっや」

急に今まで話に入っていなかった、綾音が終夜の名を呼びながら服を引っ張った。

綾音は終夜に意思を伝えたいとき、いつも終夜の服を引っ張って注目させる。

「あ、ごめん。今日は綾音を紹介するために呼んだのにな。学校の話ばかりしててごめんな」

皆も、綾音に関係のない話ばかりしていたことに反省して綾音を見る。

しかし、当の本人は気にした様子を見せずに、一言告げた。

「……………お腹空いた」

その時、間抜けにも綾音の腹の音がリビングに鳴り響いた。

第五話 お助け部（綾音とお風呂）

終夜が綾音と出会ってから2日経つ。

なんでもか終夜に対する警戒が初日で完全になくなったため、終夜も今では妹のように接することができている。

綾音が最初に興味を持ったのはテレビだった。

箱の中で人やアニメのキャラクターが動いて話す。

まるで江戸時代からタイムスリップしてきたかのように、最初は警戒していて終夜の後ろから出ることができなかった。

終夜はなんども落ち着きながら説明して、テレビが安全でおもしろいものだと教えた。

そしたら警戒を解いた途端、テレビから離れなくなった。

だからこの時は“あれ”に入らなかったのだ。

そして2日目、終夜が友人を連れてきた日に、綾音は創造について興味を示した。

終夜が友人と話していたことを聞いていて興味を持ったようだったが終夜自身、具現化がほとんどできないから実物を見せることができない。

かと言って理論を説明しても分らないだろうということで、とりあえず媒体が重要だという話をした。

そしたらうれしいことに、なら綾音の媒体は「しゅうや」、と云ってくれた。

どうやら小鳥遊姉妹の媒体がお互いだと聞いて、そう思ったらしい。2日目の夜にはさすがに“あれ”に入る必要があった。

終夜は前日の夜に、綾音がテレビに夢中になっている間に入ったのだが、綾音はまだ入っていない。

さすがに女の子としてもこのままではいけないので、意を決して教えることにした。

綾音は常識や生活に関しての知識に欠けている。

箸の持ち方、電子機器の使い方、創造……

その中で困ったのはそう、“お風呂”だった。

当然お風呂の知識もなかった。

お湯で頭や体を洗う。

簡単なことだが、初めての人、特に綾音のような人が一人でできる作業ではない。

とりあえず最初は口で説明してお風呂場の外で待機。疑問があればその都度説明することにした。

「　　というわけだ。理解できたか？」

「………分かった」

綾音は自信満々といった感じでお風呂場に向かった。

「着替え忘れてるっ」

「……そうだった。今日のパンツは………何がいい？」

「なんでもいいからっ」

「……そう………ならこれにする」

綾音は毎回下着や服を選ぶのが楽しみだった。

毎日着る服を自分で楽しみながら選んでいるはずなのだが、なぜか最初に終夜に聞く。

そのたびに終夜はなんでもいいと答えるので、結局自分で選ぶ。

下着選びも同じだった。

終夜が、綾音がピンクの下着を選んだことに気づいて、パジャマと

お揃いだなと思ってしまったことは秘密だ。

「全部脱いだ？」

「うん………これ」

横開きのドアを開けて、脱いだ下着と服を終夜に差し出す。

「こっちに渡さなくていいからっ。脱いだものは洗濯機に入れるの
っ」

「分かった」

どうやら洗濯機を覚えていたみたいだ。今度は電子レンジに突っ込まれたら洒落にならない。

しかし、脱ぎたて〓温かい〓電子レンジの方程式が終夜の頭の中で成り立ってしまったのは秘密だ。

そうとうパニックになっているようだ。

「（これはしょうがない。女の子が間近で裸なんだから）」

初めて会った時とは状況が違う。

今回は妙に生々しいのだ。

「じゃあお風呂場に入って」

綾音がお風呂場に入ったのを確認して終夜は脱衣所に入った。やがて、綾音は言われたとおりにシャワーを流す。

シャワーの音が消えるとゴシゴシという音が聞こえてきた。

「（言われたとおりになってるじゃないか）」

何か必ずハプニングが起ると構えていたのが杞憂に終わりそうだと安心したのも束の間、綾音が声をかけてきた。

「背中に届かない」

まさかここまで頭が回らない子だとは思わなかった。

「そ、それはほら、タオルを横に伸ばして後ろに回すんだよ。そしてたらのこぎりみたいにゴシゴシできるだろ」

「……のこぎりって何？」

「……………」

「……しゅうや洗って」

説明するのがめんどくさくなってきた。

いや、分かりにくい例えを出した自分が悪いのだ。

背中を洗ってやればいいだけ、もうついでに頭も洗ってやれば済むはずだ。

深く考える必要はない。相手はなににも考えてはいないのだ。自分が頭を悩ます必要はない。

そう意を決して、ズボンの裾をまくって風呂場に突撃した。だが入った瞬間、終夜は後悔する。

当然のことだけど何も身に着けてはいない。

入った瞬間ダイレクトに綾音の裸体が視界に入ったのだ。

透き通る肌に浮かぶ滴。泡が肌から滑り落ちてきている光景。そして穢れを知らない無垢であどけない顔。

普通の思春期男子なら泣いて喜ぶ光景かもしれない。
だが終夜はここで理性を保つ必要があった。

一応の保護者として。

せめてここで恥ずかしがる素振りを見せてほしかった。

無防備すぎるのだ。この無防備な姿を見て、なんかもういいかな、
と思ってしまうのが怖かった。

「と、とりあえず綾音、男の人がお風呂場に入ってきたらタオルで
少なくとも前を隠せ」

「……しゅうや、服着てる」

お風呂場は衣服を一切身に着けないところ、終夜は綾音にそう教え
た。

綾音の指摘は確かに正しい。しかしそれは場合によって変わることを
分かってほしかった。

「俺は綾音の背中を洗いにきただけだから」

「服……脱がないと洗えない」

「俺は洗わないのっ」

「……洗わない人は汚い……ってしゅうや言った」

「あとで……いや、もう分かった。脱いでくるよ」

決して今説明するのがめんどろになったのではない。

このことで今後、また変な誤解で間違った知識に変わってしまうこと
を恐れただけだった。

終夜は腰にタオルを巻いて再度風呂場に入る。

「・・・しゅうや、前を少ししか隠してない」

「男はいいのっ」

「なんで？」

「俺の胸は固い。綾音の胸は柔らかい。これが理由だ。さっさと背中洗うぞ」

風呂に入ってもいないのに、すでにのぼせそうだった。終夜が綾音の背中を洗っている間、終夜は綾音が自分の胸をふにゆふにゆと触っていたのを見ないようにするので大変だった。

「頭も洗ってやるから覚えなよ」

「・・・うん」

おそらく最初は嫌がるだろうと思って、終夜はシャンプーハットをあらかじめ用意していた。

試しにシャンプーハットをつけない状態で頭からシャワーを流してみたら暴れ出した。

抱きつきそうになったのですぐさまやめてなだめる。

そして今度はシャンプーハットをつけてシャワーを流す。

先ほどのがよほど嫌だったのか、頭を洗っている間、ずっと両手で顔を覆っていた。

綾音の髪は短いから洗うのにさほど苦労はしない。

一通り済まして綾音を湯船に入れる。

その間に終夜は自分の体と頭を洗うことに。

終夜が体を洗っている間、綾音がじつとこちらを見つめる。正確には終夜の胸を見つめていた。

「胸、固い？」

「男は固い。俺は筋肉もそれなりにあるしな」

「触っていい？」

「・・・少しだけだぞ」

「うん」

さわさわと触ってきてくすぐったさを感じたが、綾音は言われたとおりすぐに手を放した。

「固かった・・・綾音は柔らかい・・・触る？」

「触りません」

湯船に一緒に入ると言った綾音の誘いを丁重にお断りして2人は浴室を出た。

終夜は綾音の髪をドライヤーで乾かして櫛で梳いてあげる。

シャンプーハットもそうだが、櫛やシャンプー、リンスはすべて終夜が綾音用に買い揃えたものだった。

一通り終えた後、最後にフルーツジュースを与えて終夜はやっと一息つくことができた。

高校には部活というのが存在する。

部活には創造を使う部もあれば、創造をまったく使わない部も存在する。

スポーツ系は創造を使わないのだが、剣道部、空手部等は限定された中で使用するルールもある。

Eクラスに選ばれる生徒は、当然創造を使わない部を選択する傾向にあるのだが、鷹左右学園にはその両方が含まれている部が存在していた。

「お助け部？」

「ああそうだ。ま、簡単に言うと部のスケットをするところだな。部活は創造を使うところと使わないところがあるから、お助け部にも当然創造を使う内容と使わない内容のスケットが転がり込んでくるってわけだ」

「まあ部活はどこかしら入りたいからな。特になければそこがちょっといいんじゃないか？」

「私も賛成です」

「ボクもボクも」

あまりにもスムーズなやり取り。

大河の持ちかけた話に疑いはなかった。

そしてこの時大河の顔が一瞬にやりとしたことに、誰も気づかなかった。

「失礼しまーす」

「待ってたわ。柊君」

大河に案内されるまま部室に入ると、目つきの鋭い、パワフルな感じの女性が終夜たちを迎えた。

出るところが出ていて、引っ込むところが引っ込んでいる、非常にプロポーションのいい女性だった。

それに加え、どこか気品のある雰囲気醸し出している。

「カガリさん、連れてきました」

大河の知らせで、カガリと呼ばれた女性は静かに微笑んだ。

「嵌められた・・・」

「みたいだね」

その様子を見て、大河がこの女性に頼まれて終夜たちを連れてきたのだと湊と終夜は気づいた。

「まずは自己紹介から。私はお助け部の部長をしている、2年のカガリよ。そのままカガリでかまわない」

とりあえず事情を説明するように終夜と湊は大河を睨んだ。
大河はあっけからんとした様子で説明する。

「カガリさんとは姉貴繋がりで知り合ったんだ。そこでお前らを紹介してほしいと頼まれてな」

「どうせ美人の頼みは断れないとかなんとかで軽く引き受けたんだろ？」

湊が決めつけるように言ったのだが、大河の答えは意外なものだった。

「いや、姉貴に脅された」

よほど恐ろしい脅され方をしたのか、微妙に震えていた。

大河のシスコン対象で、ここまで震える脅し方をする大河の姉に皆興味を持つ。

だが下手に興味を持って巻き込まれたら困るということ追及はしなかった。

「それで、単刀直入で申し訳ないんだけど、入部してくれないかしら？」

大河に嵌められた形をはいえ、終夜と湊は入部することに異存はなかった。

どちらにしろ入りたい部活がない。

希と望を見ると、2人とも異存はないようだ。

「この部には私と大河さんを含めて3人しかいなかったのよ。さすがに人手不足で困っていたの。入ってくれて助かるわ」

さっそくと、入部届を取り出して書くように促した。

見た目と雰囲気と同様、行動的なようだ。

「でも私たちじゃないして力になれないと思うのですが・・・」

Eクラス生徒の集まりだ。創造がほとんどできないのと同義である終夜たちにこの学園の部活のスケットができるとは思えなかった。

「あら、創造をするだけが部活じゃないわ。私も運動とか苦手で、スケットの要請ってスポーツ系が多いのよ。だから気にしないで」

「でも……」

男性陣は皆身体能力がそこそこあるが、希たちは部の助けになるほど運動ができるわけではない。

むしろ希も力ガリ同様、運動が苦手だった。

「ふふ。本当のことを言うとな、大勢の人と一緒に部活をしたかったのよ。駄目、かな？」

上目遣いでのお願いではなく、妖艶な笑み。

そんなことを言われて断れるわけがない。

スケット以外に事務の仕事もあるからと説得されて希は入部届に必要事項を書き込む。

皆が書き終わってから縁が名前を確認しながら紙を集めていると、なぜか終夜のところで止まった。

「不動終夜……あなた、小学校はどこ？」

終夜は力ガリの質問の意図が分からなかった。

いや、思い当たることはあったのだが、それと力ガリが何の関係があるのかが分からなかった。

人前であり小学校のことは話したくなかったが、力ガリの真剣な目を見て、これが単なる好奇心で質問したのではないと感じて口を

開く。

「……中央第一小学校」

「……………」

終夜が学校名を告げると、カガリは一瞬微妙な表情をしたがすぐにこやかになって紙をまとめた。

一瞬見せたその表情は、なぜだか嬉しさと悲しさが入り混じっていたように見えた。

「皆さんありがとうございます。さっそくで申し訳ないんだけど、終夜君と月城君の運動能力を確認するためにも、一つスケットをお願いしてもいいですか？」

その申し出を断る理由はなかったのだが、なぜか終夜だけ名前で呼ばれたのが疑問だった。

カガリが出した部活は二つ。
空手部とサッカー部だった。

終夜と湊はオールマイティーに運動ができたが、空手部は先鋒枠が空いていてできるだけ強い人がいいとのことだったので、知識のある終夜が空手を担当することとなった。

「じゃあサッカーの試合に行ってくるよ。皆は終夜のほうを応援してくれてかまわない。俺は足手まといにならないようにかつ、そんなに目立たないようにするつもりだから」

「いや、俺も目立たないようにするつもりだけど」

「あら駄目よ。先鋒がそんなこと言っちゃ」

「・・・・・・・・」

普通ならここで女の子にかっこいいところを見せようということ
で気合を入れるところなのだが、あいにくと終夜にそんな気はない。
むしろスポーツとはいえ、戦闘の形を取ることを極力したくはな
かった。

しかも試合形式はフルコンタクトカラテ。

通常、高校生が行う空手は伝統空手といって、寸止めが基本のル
ルだ。

しかし、フルコンタクトカラテは寸止めをせず、顔面と股間以外の
部位に直接加撃をするルールだ。所謂、実践空手というやつだ。

高校生が行うルールではない。

そのことに少し疑問を感じながらも終夜は道着に着替えて体育館に
向う。

今回は他校との練習試合とのことで、そんなに固くなる必要はない。
しかし、お助け部員としてスケットをするのだから、真面目にやら
ないわけにはいかなかった。

「それでは煌学園キラ学園対鷹左右学園たかざうの練習試合を始めます」

両校挨拶を交わして先鋒が前に出る。

「おい、あいつってEクラスの下手糞だよなあ」

「ああ。なんであいつがこの試合に出てんだ？」

「単なる目立ちたがりではないのは確かだな」

応援席で湊を除く皆が応援している隣で妙な会話が聞こえてくる。

「どつという意味でしょう？」

その会話を聞いて疑問に思う希に対して、カガリはただ微笑むだけだ。

一方、終夜も応援席の声が聞こえてきたわけではなかったが、自分に対する妙な視線を感じていた。

まるで自分がここにるのが場違いだと言つような視線。

そしてお互いに防具を一切身に着けないことにもまた、疑問だった。

「構え！」

終夜は様々な疑問を振り払って目の前の試合に集中する。

試合時間は3分の三本勝負。

攻撃可能とされた各部位に「突き」「蹴り」「打ち」等を決め、相手を3秒以上ダウンさせるか、戦意喪失にさせた場合、「一本」勝ちとする。

顔面と近的への直接加撃と頭突きは禁止。

投げ、首相撲の禁止。

ただし背後からの攻撃は可能だった。

これはおかしい。さすがにダウンした相手の攻撃は禁止だったが、背後からの攻撃が可能というのが終夜の不安をより一層仰いだ。

「始め！」

試合開始の合図と同時にものすごい音が発生する。

試合開始と同時に終夜が後ろに吹っ飛んだようだ。

それはあまりにも一瞬の出来事だった。

応援席から見ていた希たちが気付いたときには、終夜が後ろに吹っ飛んでいて、相手は終夜が立っていた場所から少し前の位置で手を伸ばしていた。

「不動さん！」

「カガリさん、どういうことっすか！」

珍しく動揺を見せる大河がカガリに問い詰める形をとった。

「あれは創造実践空手じゃないですか」

「あら、言ってなかったかしら？」

創造実践空手とは、その名の通り創造を使用した実践空手のことだ。ただし身体能力強化に限る。

「神」というエネルギーを身体に必要な部位に流し込む。

「神」とは、創造によって発生するエネルギーのことで、これを固めて物を創り出したり、そのエネルギーをそのまま身体強化に使用できる。

そして、「神」を操る者、創造する者のことを「創造主」と言う。

創造主たる選手は、攻撃も防御も創造で強化して行うため、どんなに空手に強くても生身では絶対に勝てない。

しかし、終夜は生身の状態でかろうじて反応ができた。

相手の攻撃速度に反応したのではない。

試合が始まる瞬間、相手が普通の方法で攻撃してこないということに一寸早く気づいたのだ。

本来なら内臓までダメージがきているはずの攻撃を、かろうじて後ろに飛んだため、大事には至らなかった。

本来ならそれでも大怪我をしていたらろう。だが終夜は一瞬攻撃が当たる箇所に、自分の創造力を集中させたから大事には至らなかったのだ。

「一本！」

審判の言葉を聞きながら終夜は立ち上がる。

「どうやらカガリ先輩に一本取られたみたいだな」

終夜にはまだ、余裕が見られた。

第六話 創造実践空手

「カガリ先輩どういことですか!？」

珍しく息を荒げた希に対して、カガリはただ微笑むだけ。

「ありゃあ内臓とかヤバいんじゃないか？」

こちらも珍しく真剣な目で終夜の状態を確認すべく、目を凝らしていた。

「ふふ、見えなかった？終夜君はきちんと反応して後ろに飛んだわよ」

「後ろに飛んだだけでなんとかなるレベルじゃない気がするんだが」

「見ていれば分かるわ。終夜君はあなたたちが思っている以上に強いわよ」

にこにこと笑うカガリの目には、確かな自信と期待が見えた。

吹っ飛んで壁に叩きつけられるぐらい威力があつたはずなのに、終夜は無傷だった。

強いて言うなら、叩きつけられたときに背中を少し痛めただけ。それでも怪我と言うほどではない。

終夜の表情には余裕が見られたが、頭の中まで余裕ではなかった。

「（まさかこんなことになるとは……見事に嵌められたなあ。さて、どうするか……）」

このまま怪我を理由にして棄権することはできる。

しかしお助け部として、仕事はきちんと果たさなければならないという使命があった。

本来なら終夜は力ガリに嵌められたのだから棄権しても文句は言えない。

しかし終夜は妙なところで人が良かった。

もともと綾音の時もそうだ。

自分の家に置く以外に、もっとよく考えれば他にいい方法があっただろう。

それでも自分がきちんと面倒を見なければと妙な使命に燃えていた。今も同じだ。

お助け部員としてきちんと依頼は果たさなければならぬ、と。

それに加え、相手の様子を見て今なら余裕だ、と終夜は確信した。

「おいおい起き上がれるかあ？」

「心配には及ばない」

馬鹿にした言い方をする相手に対して、終夜はたいしたことないと答えて位置に着く。

応援席の人たちも含め、対戦相手は軽く動揺していた。

下手すれば死んでもおかしくない攻撃に直撃したのにもかかわらず平気な顔をしている。

だがこの場にいる者の誰一人、終夜が創造を使つたとは思わなかった。

Eクラスの、しかもあの有名な不動終夜が身体能力強化なんて使えるわけがない。

この創造実践空手は、空手の形をした身体能力強化を競う競技である。

もともと身体能力強化は上位の技術だ。

自分の創造を自分の中で形成する技術。

自分がどうなりたい、こうしたいというのを強く想像するのだが、これがけっこう難しい。

重要なのは創造力という形をどう想像するかだ。

創造力に形はない。人それぞれこういうものなのかを想像して、神しんをそれぞれの部位に流し込む。

終夜が見たところ、この対戦相手はそれなりにうまい。

しかし、余裕を見せすぎていた。

本来は構えた時点で、身体全体に神を流し込んで攻撃と防御を同時にとるものだ。

だがこの対戦相手は防御を一切せず、手と足の先にしか創造力が流れていなかった。

「始め！」

相手は先ほどと同じように猛スピードで終夜に向かってパンチを繰り広げる。

しかし今度はきちんと見えていた。

終夜は右手に神を流し込み、腕を横に振るった。

まるで自分の周りに飛んでいる蠅を払うかのように。

当然防御を一切していなかった相手は真横に吹っ飛んだ。

「い、一本！」

あまりの出来事に観客はどよめく。

この場にいる鷹左右学園の生徒は皆終夜を知っている。

創造ができないという認識で。

その終夜が相手を一撃で吹っ飛ばしたのだ。
単に運動神経がいいというだけでは説明がつかない出来事。
反応できただけでも意外なのだ。

「何が起きたんだ？」

観客の誰かがつぶやく。

誰一人として終夜が何をしたのか目視できなかった。
対戦相手は気絶している。

内臓まではいかなくても骨までは確実にきているだろう。

「続行不能により、勝者不動！」

終夜は一礼して後ろへ下がった。

「すごかったぜ終夜」

「不動君って創造が上手だったんだね」

練習試合が終わって、更衣室から出た終夜を口々に賞賛する。

結果は3 - 2で鷹左右学園の勝利に終わった。

それでも空手部員は大きく喜ばず、相手校も含め終始微妙な雰囲気
が続いていた。

「ほんと、私も実際に見てびっくりしちゃったわ」

いけしゃあしゃあと、カガリまで褒めたので終夜は睨んだが、にこ
にこ微笑むだけ。

カガリのおかげで周りの終夜に対する評価が変わったに違いない。これは終夜が望んでいなかった結果だ。

今まで嘘をついていたわけではない。具現化は本当にできないから中途半端にできるところを見せなくなっただけ、そう皆に説明した。

「月城君のほうも大活躍だったそうじゃない？」

「・・・・・・」

こちらもカガリをジッと睨んでいる。

「俺のほうもまんまと騙されましたよ。まさか創造ありの変則ルールだとは思いませんでした」

湊のサッカーも創造を含めたなんでもありのルールだったようだ。

サッカーで創造を使うなんて話は聞いたことがないが、たまにお遊びでやることがある（教師の立ち会いが必要）。

そんなことにスケッチを頼むなど文句を言いたいところだが、それ以上にカガリに文句を言いたかったのは言うまでもないだろう。

「私も直前まで知らされてなかったのよ。今度は気をつけるから許して、ね？」

悪びれた様子がまったく感じられないものの、陽気な先輩の姿を見て毒気を抜かれたのか、2人ともため息をついて帰宅の準備を始めた。

「そろそろ帰ってもいいですか？」

「ええいいわよ。お疲れ様」

最後まで笑顔を崩さなかった力ガリは、手を振って終夜たちを見送った。

「お二人とも今日はお疲れでしょうからタクシーにします？」

2人は希の提案に乗ることにした。

タクシーと言うと、昔はお金がかかるから高校生が下校時に利用するものではない。

だが現代のタクシーは昔とは違い、お金が一切からない。

理由はいくつかあるが、現代のパソコンにはイマコン（Imagination Controller）というものがついてるのが理由の一つだ。

重要なのは「想像」であって、「創造」はその延長線上にある。

イマコンも「想像」することによって動かしたいことをインプットして動かす。

イマコン自体はコントローラーという名称があるが小さなチップの形をしているため、専用の人形にくっつけてインプットした通りに動かすことも可能だ。

「終夜、あの先輩のことどう思う？」

タクシーの中で湊が話を切り出す。

もともと終夜と湊はあの程度で疲れるほどやわな体をしていない。希が提案した時、湊が終夜に目配せをしたのだ。

「嵌められたことか？」

「お前のことを知った感じだったが」

「何か知っているのは間違いないだろうな。だけど俺の顔を最初に見たときはそんな素振り見せなかったし、俺の名前を見て気づいたみたいだったから気にすることもないと思うぞ」

真面目な調子で話す湊に対して、不真面目とまではいかなくても、真面目とは言い難い口調で答える終夜に湊はため息をついた。

「……………まあ今は様子を見ておこう。ちゃんと気を付けておけよ」

「あいよ」

湊は一つ気になっていた。

終夜を確かめるために創造実践空手に行かせたのは分かる。

しかし、なぜ自分まで試されたのが分からなかった。

しかも聞いたところによると、カガリに頼まれて急遽創造を使ったサッカーに変更したようだった。

一方、終夜も湊とは違う部分でカガリに興味を示していた。

あの人は自分の過去とか以前に、大河たちを含めた全員に何かを隠している。

「ただいま」

「あ、しゅうや……………おかえり」

終夜が学校から帰ると決まって綾音が迎えてくれる。

毎日一人で家にいるのはさすがに退屈なようで、終夜に遊びを迫る。最近では対戦格闘ゲームにハマっていた。

「今日も・・・あれ・・・・・・・・・・」

綾音が指さした先にあるのはテレビゲーム。

「今日もやんのかよ」

綾音は当然ゲームなんて最初は知らなかった。

だが綾音は妙に物事の吸収が凄まじかった。

終夜は決してこのゲームが苦手なわけではない。

だが綾音の吸収力は終夜の今までの経験を上回っていた。

「また負けた・・・・・・・・・・」

「しゅうや・・・弱い」

「綾音が強すぎるんだ」

「・・・次」

二回戦を急かす。

だが、何回やろうと終夜の負けは目に見えていた。

「待て。そろそろ違うゲームにしよう」

「・・・ずるい」

このずるいと言うのは、新しいゲームにしたら今日中には勝てない。

それを分かっているから終夜も提案したのだ。

もっとも明日になるころには、終夜の負けが確定しているのだが。

「今度はレースゲームだ」

この日は半周の差をつけて終夜が勝利した。

だが次の日、終夜は一周の差をつけられて惨敗することになる。

だがそんな綾音も手先まではゲームのようにはいかなかった。

ものすごい不器用なのだ。

頭で理解できていても身体がそれに追いつかなければ意味がない。

だったらゲームも不器用になれよと終夜が思うのは無理もないことだが、好きこそ物の上手なれ……終夜のいない間に練習したらしい。

「ほら、綾音の好きなご飯の時間だぞ」

終夜が夕食を作っている間、綾音は先ほどのレースゲームを練習していた。

終夜がチラッと見たときには、CPU相手にギリギリで勝利していた。

明日はあれが大差に変わることだろう。

もちろんCPUだけでなく、終夜が相手でもだ。

「好きなことをやった後にはたいてい嫌なこともあるもんだ。どう
いう意味だか分かるか？」

「……箸」

「正解」

綾音は終夜の家に来てから様々なことを学んだ。

お風呂の入り方、服の着方、ご飯の食べ方等……………

お風呂はまだ心配だが、他はだいたい自分でできるようになった。そんな中、綾音は箸だけが未だに使えなかった。

今でも箸を握りながらぶつさして食べている。

いつまでもその食べ方はよくない。

「今日はチャプチエだ」

春雨を炒めた韓国料理だ。

伝統的な前菜で、宴席料理でもあるのだが、ご飯と一緒に食べる。変な名前だが、なかなかおいしい。

「ふぉーくは？」

「まずは箸を使う練習だ」

「ぶー」

頬を膨らませて抗議を表す。

綾音はずいぶんな食いしん坊キャラなのだが、箸を使って食べるとどうしても食のスピードが下がる。

というよりほとんど食べられない。

「豆腐を箸で食べられるくらいにはならないとな」

「……………」

以前に食べた時、粉々にしたのを思い出したのだろう。

「・・・まあ豆腐は置いて、普通に扱えるようにはなってくれ」

「明日から頑張る」

出来ない人の典型だ。

諦めた終夜はおとしくフォークを差し出した。

第七話 部活勧誘一日目（始）

「鷹左右学園・・・実験にはうってつけの学園だな」

マッドサイエンティストの研究室、という名称がぴったりの暗い部屋に一人、白衣を着た中年の男が呟く。

「それにあの学園の生徒が『あれ』を目覚めさせたか」

中年の男が言う『あれ』。

画面に映っているデータには『Project・HERMIT』と書かれている。

「手始めに爆弾を放り込んでみるとしよう。さて、どう処理してくれるか」

男はクツクツと、不気味に笑いながらワインの入ったグラスを口に近づける。

この男にとってHERMITが「誰か」ではなく、「どう処理するか」が重要だった。

入学仕立ての一年生には部活の勧誘というのが待ち受けている。

鷹左右学園ほどの高校ともなればその勢いは凄まじいものがある。終夜たちは部活が決まっているが、周りの動きまで落ち着くわけではない。

創造の使用は基本的には禁止されていないが、当然人に対する無意味な攻撃的な創造は学院以前に法律的に禁止されている。

もつとも、いくつか決められた組織の許可があれば人同士の戦闘も認められる。

空手、柔道、ボクシングは試合での殴り合いは許可されているが、路上での殴り合いは犯罪になる。

だが、創造は少し扱いが違う。

無意味な死傷者を出すことを避けるために法律で禁止されてはいるが、基本的には問題ないのだ。

そして部活動誘時はいわばお祭り状態だ。

お祭りとなれば争い事が自然とあちこちに生じる。

死人はさすがに出ないが怪我をする人は少なくない。

「そういうわけで皆にも手伝ってほしいのよ」

カガリがいつもの調子でにこにこ笑顔を崩さないまま終夜たちに告げる。

「手伝うって具体的に何を？」

この話の流れからするととんでもない内容になる。
少なくともこのメンバーに頼むのはおかしい。

「だ・か・ら、お祭り気分のいき過ぎた生徒を宥めるお手伝い？」

「だからですね。僕たちはEクラスですよ。それにそういうのは収束部の仕事のはずでしょう」

収束部………理事長の次に権力があると言われている生徒会長率いる組織だ。政府直属の機関であり、主な活動は学外で行われる。

学内の風紀等も管理する立場でもあるが、それはあくまでおまけに

すぎない。

政府からの依頼を受けて学外で起きた事件を解決する組織である。

「お前知らねえのか。収束部は今この学院にいないんだぜ」

学外の任務が多い収束部が学院にいないことは別に珍しくない。

自称情報通を語る大河の説明に湊は軽くため息をついた。

いないことが珍しいとはいえ、この時期にいないのは困りものだ。

「私収束部に依頼されたのよ。勧誘時のごたごたの収束を。だからこの期間だけ収束部の権限が持てるのよ。もちろん学内限定だけど」

学内限定とはいえ、収束部の権限が持てるのはすごいことだ。

権限と言っても創造の自由使用と取り締まることだけだが、一般の生徒からしたら魅力的になる。

そもそも収束部はなりたくてもなれないからだ。

「だから俺たちは一番創造の下手なEクラスです！」

珍しく息を荒げる湊。

だが無理もない。

カガリとの会話は会話にならない。

正直イライラしてくるのだ。

「だからその実力を部活で試したんじゃないの。二人には十分その力があるわ。それに見ての通りうちは人手不足だから」

それが湊まで巻き込んだ理由なのか。

カガリの言い分は終夜も予想していた。

だが、まだ足りない。

「希と望は？」

「彼女たちもちろん参加してもらっわよ。班は二人三組だから問題ないわ」

問題ありまくりの回答に、さてどう言い返そうかと考えたところで湊が意外なことを言った。

「分かりました、それでかまいません。組み分けはこちらで決めてかまいませんね？」

「いいわよ」

お気楽な調子で言う力ガリにどうもと言って一旦部屋を退出するよ
うに湊が促す。

部屋を出ると、湊は一旦ため息をついた。

終夜はすぐに湊の意図を読んで皆に告げる。

「じゃあ俺は希と組むよ。大河は先輩と組ますと使えなさそうだから望とな。湊はやりにくいだろうけど先輩と頼むよ」

「ああ」

終夜は何気なく淡々と決めたが、これは湊の考えに沿っていた。

あのまま話していても力ガリは絶対に引かなかっただろう。

そこまで引かないのには何かしらの理由があるに違いない。

人手不足だと言うのはわかるが、それなら収束部の依頼が来ることはまずない。

そんなに甘い組織ではないからだ。

だが実際に収束部から依頼がきているところから見て、カガリ、またはお助け部には終夜たちが来る前から収束部が一目置く存在であつたに違いない。

そんな存在がわざわざいろいろと御膳立てしてまで自分たちを利用するには何かしらの意図があると踏んでいい。

だから湊は実際にカガリを自分の目で観察することを選んだのだ。本来はそういうことは終夜がやったほうが何かと都合がいい。

終夜の洞察力のほうが当てにできるのは確かだが、カガリは終夜に対して少なからず興味を示しているから外しておく。

それにこういうことは湊の仕事だった。

終夜ができることは湊をサポートすることだ。

「分かりました」

「了解」

「りょくかい」

「先輩の色香に惑わされるなよ」

「それはお前にも言っておきたい」

軽口を叩きながら笑う二人の様は、長年のパートナーのようだった。この2人はいつもこの調子だ。

お互いの役割をきちんとこなし、パートナーがこなせるかどうかの心配はしない。

「なんだか羨ましいです」

希の呟きに望が密かに反応する。

まるで兄弟のような二人に自分たちを当てたのだろうか。
その呟きに望は何も応えず、希もそれ以上何も言わなかった。

「そろそろ相談終わったみたいね」

気づけばカガリが扉から顔を覗かせていた。

部室の目の前で話していたのだから聞かれていてもおかしくはない。
だが今の会話に聞かれて困ることはない。

終夜と湊はあえて聞こうと思えば聞ける場所で聞かれても困らない
方法をとった。

あえて外に出て話したのにわざと聞こえる場所で話す。

心理的な動揺を誘うためだ。

人は分らない理由を重ねると余計分からなくなってしまう。

なぜあえて外で話したのに、なぜ簡単に聞こえるところで話すのか。
それなのになぜ内容はたいしたことないのか。

一つ一つは小さくても理解できないことが重なるとうしても変な
勘繰りをしてしまう。

たいして意味は出ないが、簡単ないじめだった。

もつとも、このカガリに効果があるかは微妙なのだが。

「聞いてたとおりです」

「え、私今来ただけど？」

やはりやりにくい相手だと思いながら終夜は先ほど決めたことを報告する。

「あら、私には終夜君がつくと思ったのだけど？」

「終夜は希とが一番相性いいんですよ。逆に俺と相性のいい人はい

「ませんから」

「余りものかあ」

あからさまな失礼な言い方に湊は動じない。

カガリも終夜たちの意図を読んで挑発をしているのだろう。

「それでいつから行動を？」

「今日から」

「・・・・・・・・」

今さらいちいち反応しない。

だけど、この部活に入ったのは本当に失敗した。

そう誰もが思ったのだった。

「じゃあ各ルートの巡回をよろしくね」

お助け部部活動勧誘巡回。

各組決められたルートを一斉下校時まで巡回する。

その間に創造を使用した争い、または創造をいずれ使つと見られる争い、強引な勧誘の仲裁に入る。

その際、こちらが創造を使うのはかまわない。さらに相手が過剰な反応をした場合、こちらも過剰に対処しても問題ない（大怪我をしない程度）。

取り締まった場合はお助け部に待機している人（今日は湊とカガリ）に引き渡して報告書をまとめる。

三組のうち回るのは二組で、一組は待機だ。

たった二組でこの広い学園を回るのは厳しく感じるが、勧誘ができる場所は決められているからそんなに広くない。

「じゃあ行くか、希」

「はい」

一日目からカガリと2人きりで部室にいななければならない湊に少し同情しつつ、巡回を始める。

「や、やっぱり賑やかですね」

何かに緊張した様子の希に、何も気づいていない様子の終夜が答える。

「そうだな。俺はこういう中でどの部活に入るか決めるべきだったと後悔しているよ」

やはり大河はトラブルメーカーだと思いながら、周りを警戒する。ぶっちゃけた話、いつ具現化されたものが飛んでくるか分からないからだ。

それに加え、一つ気になる話をカガリが言っていた。

「収束部ってけっこう嫌われているのよ。でも収束部を選ばれるほどの人たちでしょ？だから手を出しても返り討ちにされる。だけど今ならどうかな？」

この意味することは一つ。

収束部に対して今まで手を出せなくて悶々としていたところに、急

に収束部面をしたやつが取り締まりだしたらいい気持ちはしないだろう。

今こそと終夜たちに日ごろの恨みをぶつけかねない。だから常に周囲を警戒する必要があった。

「あ、あのっ」

最初の一言から黙ったままだった希が意を決したように口を開く。

「何？」

「ど、どうして私を選んでくれたのですか？望でもよかったはずですし・・・」

「ん？いやあ望には悪いけど、希といたほうが落ち着くからね」

これは本心で特に他意はない。

しかし、本人の思っていることと相手が思っていることが必ずしも一致するとは限らない。

「そ、そういえばさっき相性がいいって・・・」

終夜に聞こえない声でボソボソとつぶやく希は、周りどころか前から見ていない。

そんな妙に乙女心全開のところにボールが飛んできた。

「危ない！」

いち早く気づいた終夜が声をあげながら、希の腕を引っ張る。

「ふ、不動さん!？」

引き寄せた結果、自然と終夜と希が抱き合う形になる。
希は内心ドキドキだったが、終夜は違っていた。

「今のがボールだったからよかったけど、きちんと警戒したほうがいいよ」

「はい・・・」

本来ならドキドキする形に終夜は的外れなことを言う。
いや実際正しいのだが、やはり終夜はどこかズレていた。

「ん？なんか人だからできてるな」

ドキドキと反省の感情を交えたままの希と何も感じていない終夜が
喧噪を見つけて中に入っていく。

喧噪の中心には筋肉むき出しの二人の男子生徒がいた。

「この場所は俺たち空手部だろ」

「ふざけんな。今日はボクシング部のはずだ」

どうやらお互いが把握している部活勧誘の時間が重なっていたよう
だ。

空手部のほうは、終夜も見覚えがある。

「ストップ。状況は理解できましたので少し待ってください。今確認
します」

終夜が二人の間に割って入り、手で制しながら希に目配せすると、希は携帯で確認を取り始めた。

「ちょっと待てや。収束部気取りの野郎に指図される覚えはねえ」

「気取りでもきちんと権限は持ち合わせています。指示に従えないなら強制退場してもらうことになりますが？」

「一年がほざくな！」

終夜に喧嘩を売ってきたのはボクシング部の男。

空手部の男は以前スケットをした時に顔を合わせているからか喧嘩を売ってはこない。

ボクシング部の男は終夜に殴りかかってきたが、終夜は軽く拳を叩^{はた}き、その手を掴んで男の背にまわしてそのまま抑え込んだ。

「どうだった？」

男を抑え込んだまま終夜は希に問う。

「どうやら複数の資料に書かれている部活名がそれぞれ違うみたいです。なのでどちらが正しいか分からないようです」

希の報告に終夜は頷いて間を開けずに口を開く。

「それなら今回は空手部が使ってください」

「なんでだっ」

終夜の指示に当然ボクシング部から文句が出る。

「ボクシング部のメンバーが俺に手を出したからです。しかもこの人は主将か副主将ですよ？ならこれ以上言葉はいらないはずですが」

「くっ・・・」

「では俺たちはこの人を先輩に引き渡しますので、これで失礼します」

終夜はわざと大きめの声で退場を告げる。

これは、争いはこれで終わりだと見物人に告げるためだ。

「趣味が悪いぞ」

見物人が散っていく中、終夜は見物人に交じっていた大河に向けてそう言い放った。

大河が最初からニヤニヤしながら見物していたのに終夜は気づいていた。

「すまんすまん。それにしてもすごい手際だな」

「あのなあ、しどろもどろしてたら、たとえ内容がしっかりしていても説得力がないだろ」

「お前、それ全校生徒前のスピーチでも同じことが言えるか？」

「言えるだろ」

言ってる意味が分からないというふうに答える終夜に大河は苦笑い

する。

希と望と大河の終夜に対する根本の評価は同じだろう。

終夜はどこかズレている、と。

「とりあえずこの人をカガリ先輩に引き渡すからあとよろしく」

「離せっ」

抑えられている終夜の手からなんとか逃げ出そうと体を揺らすが、終夜はがっちり捕えている。

「こういう場合って寝かせてもいいんだっけ？」

「いや、一応先輩なんだからやめといてやれよ」

「冗談だ」

真顔でそう答える終夜に大河は未だに苦笑い。

「不動君って、月城君と柊君を足して2で割ったような感じだね」

それは褒められているのだろうかと思終夜は少し考える。

終夜の微妙な表情を読み取ったのか、望が付け加えた。

「不動君って柊君ほどおちゃらけてはいないけど、普段は賑やかでしょ。でもいざって時は月城君みたいに冷静に物事に対処するから二人の平均かなあって」

「俺ってそんなにおちゃらけてる？」

大河の呟きにスルーしつつ、終夜は過大評価だと答えた。

「俺は湊ほど冷静に対処はできないよ」

終夜は少し表情を落としながら言う。

望の言った冷静な対処というのは物事の大きさに左右される。

生徒同士の軽い喧嘩程度はたいしたことない。

でも、もっと大きな事件が起きたらこんなふうにはいかないだろう、と。

終夜は口には出さなかったが、希は終夜が何を言いたかったのか分かったのだろう。

口調を明るくして言った。

「そろそろ行きましょう不動さん。望と柊さんもサボっちゃだめですよ」

「へーい」

「分かってるよ」

どうも信用に欠ける返事を聞きながら、終夜と希はその場を後にした。

第八話 部活動誘一日目（終）

「さっそく捕まえてきたわね」

終夜が部室の部屋を開けて早々に、そろそろ来ることが分かっていたらしい力ガリが、足を組んで両手で頼杖をつきながらそんなことを言った。

湊は書類整理をやっている。

一人でやるには多すぎると言える量を。

まあ当初の目的からは外れてないから大丈夫だろうと、終夜は声をかけずに力ガリに報告する。

「ボクシング部の副主将二年、まきはなひついで榎原浩二。喧嘩の仲裁に入った際、俺に創造を使って殴り掛かってきたので拘束しました」

このボクシング部も創造使用ありの部活だ。

神付加による常人には目視できない速さでパンチを繰り出したため、創造を使ったかどうかまでは一般人には分からないものなのだが、これは終夜にとってはむしろ得意分野だった。

「ま、その程度なら部活動停止ぐらいでいいでしょ。」こ苦労様」

「お前、俺が創造したなんてわかんのかよ」

これは驚きではなく、無駄な足掻き。

創造を使わずに殴り掛かってきたらここまで大事にはならない。だからここぞと足掻いているにすぎない。

常人に創造を使ったかどうかなんて分からないからだ。

創造して具現化する際、『思念』というものが飛び交うのだが、身

体能力強化の際にはこの『思念』は飛ばない。

実力のある者なら目を凝らせば身体能力強化に創造を使っているのが分かるのだが、終夜はEクラス。分かるはずがない思われても仕方がなかった。

「あなたは創造を一切使用していないと？」

カガリの目が鋭く、冷たい表情になって槇原に問う。

その場にいなかったカガリが、実際に創造を使ったかどうかなんて分かるわけがない。

でもこの時槇原は、すべてを見透かされたような感じがしていた。流れる汗が止まらない。

槇原だけではない。湊も希もわずかに恐怖していた。

「い、いえ……………」

同じ二年生に敬語になる槇原。

目も合わせられず、生気を吸い取られたように脱力していた。

「ご苦労様。引き続き巡回お願いね。報告書は放課後まとめてやってもらうから」

笑顔で言うカガリに、終夜は「はい」と答えて、少し怯えていた希の手を引っ張って早々に退出した。

「怖がらなくても大丈夫だよ。基本的には無害だと思うから」

終夜は心の中で自分と湊以外はと付け加えて、希の怯えを取り払うように言う。

「大丈夫です。少し顔が怖かっただけですから」

希はカガリのあの姿に重なるものがあつたのだらう。

それにあれは生物として反射的に感じる恐怖に近かった。

カエルが蛇に出会ったら、反射的に恐怖する。

たとえばこうが友好的であつても、体が勝手に反応してしまうのだ。カガリのあの姿に終夜でさえ、少し引いたぐらいだ。

「巡回とはいえ、勧誘の雰囲気だけでも楽しもう。俺らは体験できなかったから」

大河のせいで、と少しふざけた口調で希に言う。

終夜が気を遣ってくれたことに気づいた希は笑顔で「はいっ」と答えた。

「結局今日取り締まったのは2組合わせて3人ね。どれも大事にはならなかったみたいだしよかったわ。私としてはちよつとつまらないけど」

団体でのいざこざがなかった分、人数も少なかった。

あれから終夜はまた1人捕まえて、大河も1人だ。

望が妙に興奮していたことから、大河も活躍したのだらう。

各自、報告書をまとめて帰路に就いた。

「終夜すごいんだよ。ビー玉をはじいて相手を昏倒させたんだから」

「たいしたことねえよ」

自分の時は先輩に対して眠らすのはやめといてやれと言っておきながら、昏倒させるなんてと終夜は心の中でツツコむ。

望が言うには、相手が終夜の時と同じく殴り掛かってきたようだ。しかし相手は大河ではなく、女の子の望に向かって。

大河はすぐに反応してビー玉を相手の額に飛ばしたらしい。

終夜はそれを聞いて、それは昏倒させても仕方ないかと納得する。

おそらく自分の場合だったら相手に外傷を与えかねなかったと内心ホッとしていた。

「飛ばしたビー玉は媒体のほうか？」

これは創造で具現化させたビー玉なのか、自分の媒体に神を付加させて飛ばしたもののなのかという意味だ。

「ああ、今回は媒体のほうを飛ばしたぜ。とっさだったからな」

「それはすごいな」

「そうか？まあだからいつもビー玉は複数持ってたんだ」

自分の媒体を武器に飛ばせるのはすごいことだ。

確かにビー玉という、持ち運びのいい不確定媒体なら可能ではある。具現化したものを飛ばすとなると、創造↓具現化↓射出という手順になるが、媒体そのものを飛ばすとなると、神を付加する↓射出と手順を一つ飛ばすことができる。

特に、創造↓具現化は上手い人でないと時間がかかるもの。

これは力が拮抗したバトルの際に、大きなアドバンテージとなるものだ。

「不確定媒体っていうのも不便なことばかりじゃないんだね」

陽気に言う望に、大河はそうでもないさと答える。

力が拮抗した際に大きなアドバンテージがあるとはいえ、拮抗するレベルでなければ意味がない。

本来の実力の50%しか出せないため、ほとんどの敵には敵わない。大河はそれを痛いほど理解していた。

「湊のほうはどうだったんだ？」

「ああ……」

話題を変えるために湊に振った大河だったが、本人の顔は少しやつれていた。

「そういえば俺が部室に行くたびに書類の整理してたな」

もつとも、あの量なら仕方がないと言える。

「なんの書類だったんだ？」

「今までスケットをした際の報告書の整理と、依頼がきていたのを俺の判断でスケジュールを組ませられていた」

「報告書の整理ってあの量全部か？」

「いや、先生に頼まれたっていう全く関係ないやつも含まれている」

「……一年にやらせるものじゃないな。湊じゃないとできなかっただろうし。いや、湊でも厳しかったか」

当初の目的を考えると、湊の本番は明日からだ。だがこの調子だと、一筋縄ではいかないだろう。それが分かっているても湊は決して後悔はしない。お助け部に入ったことは後悔しても、自分で決めた仕事を投げ出すようなことはしない。

だがその成果もあつて、分かったこともある。過去の報告書をまとめるほどあつたのだから、お助け部というのが前々からあつたのは間違いない。

これで終夜と湊が感じていた違和感の一つが杞憂だったと証明された。

「それでスケジュールのほうはどうだったんだ？」

「とりあえず文系は数が少なかったこともあつて希と望たちにすべて振り込んだ。ただ……」

「OK、もう理解した」

湊が深く悩んだ理由が分かった終夜がげんなりとした様子でそう言う。

「え、どういうことだ？」

よく分かっていない大河の疑問に、疲れている湊の代わりに終夜が答えた。

「要するに文系よりスポーツ系が多かったんだろ。それもおそらく創造を使う部活だ」

「ご明察。あの人、おそらく俺に決めさせる前からある程度振り分

けてたに違いないよ」

あえて創造を使うスポーツのみスケットの申請を許可したということだ。

お助け部がそんな取捨選択していいのかと疑問になるが、あの先輩なら自由勝手に決めてもおかしくない。

「それで結局どうしたんだ？」

「ああ。終夜には悪いが、明日の創造格闘技に出てくれ。明日ちようど終夜たちが待機だから、代わりにその待機を教師に頼むことになっている。おそろしいのは、その教師の根回しがすでに先輩のほうでついていたってところだ」

要するに湊に組ませておきながら、自分の中である程度振り分けていたということだろう。

すべて命令で指示するより、どんな形であれ自分たちで決めさせることで、ある程度不満をなくすといった方法だ。いろいろな意味で恐ろしい先輩だった。

「創造格闘技って、なにすんだよ」

「なんか文化祭のイベントでやるものを模擬戦として見せるらしい」
見た目で呼び込もうって腹なのだろうか。

「それってどこの部活だ？」

「いや、文化祭運営委員会。勧誘と言えば勧誘だけど、文化祭の時に参加者を集めるためらしい」

今からやる気にさせて鍛えさせるという意味があるのだろう。
せつかく参加者が集まっても弱ければ意味がない。

格闘関係の部活は参加するが、一般の参加者は少ない。
一人も出ない年もあるぐらいだ。

「要するに殴られ役なんだろう」

いつものように直球でものを言う大河。

珍しく湊は、大河の直球な物言いに何も言わない。

「それは分からないだろ。相手は分かるのか？」

「確かボクシング部だったな」

「Oh...」

ボクシング部という名前に、終夜と希は最初にひっ捕らえた副主将を思い出す。

彼らが終夜に対していい感情を持っているわけがなかった。

「そういえば終夜は副主将をひっ捕らえたんだったな。ボコボコに
されないように気をつけろよ」

「サンドバック役でないことを祈ってるよ」

終夜は「返り討ちにしてやる」と言えるほど好戦的でもなく、苦笑
いするしかなかった。

「安心してください。そうになったら私、頑張って抗議しますから」

「ありがとう」

希がどのようにして抗議するのか想像もつかなかったが、そうならないことを祈る終夜だった。

第八話 部活動誘一日目（終）（後書き）

次話から物語が佳境に入ります。

第九話 部活動誘二日目（創造格闘技）

「彼」は生まれつき“具現化”ができない。
ものを生み出すということが一切できなかった。

だが、“創造”ができないわけではない。

彼は血のおかげか、はたまた運命のいたずらか、創造に長けていた。
小学校に入るころには誰よりも創造に長けていた。
しかし彼は幼かった。頭が悪かったわけではない。
心が幼かったのだ。

無論、年相応の心を持った彼は別に悪くない。

問題があったとすれば、まだ幼かった彼にあれほどの力を与えた“
何か”が悪かったのだ。

「しゅうや、今日学校行くの？」

「ん？行くけど」

なぜか心配そうな顔で不可解なことを聞く綾音に、終夜は制服に着
替えながら答える。

「なんか、いやなかんじがする」

綾音の第六感なのだろうか、綾音は終夜の服をギュツと握って離れ
ない。

その姿は心配というより怯えているように見えた。

終夜は落ち着かせるように綾音の頭を優しく撫でる。

綾音は今日終夜が創造格闘技に出場するというのを知らない。

それなのに、今日に限ってそんなことを言うのだから無視できるものではない。

だが、だからといって逃げるわけにもいかなかった。

「俺は大丈夫だよ」

「しゅうや、強い？」

その「強い」というのは、肉体のことなのか、精神のことなのか。どちらにしてもこの場で言う答えは一つしかなかった。

「強い」

綾音を安心させるように力強く言い切る。

「・・・・・・・・」

綾音がどうしようかと悩んでいるところに家のチャイムが鳴った。終夜は綾音が服を掴んだ状態のまま玄関を出る。

「みんなどうした？」

訪問者は湊、大河、希、望いつものメンバーだった。

「不動君が今日の模擬戦で緊張してるんじゃないかと思って、リラックスのサポートにきたんだよ」

「違っただろ。相手の情報が分かったから伝えに来たんだよ。希たちとはたまたまそこで会ってたな」

「おはようございます」

「おはよー」

大河の冗談に湊の訂正。

小鳥遊姉妹の挨拶に、綾音の怯えの顔が自然となくなってきたが、様子がおかしいのは隠せない。

綾音の異変にいち早く気づいた希が、いつものように膝を落として挨拶をした。

「おはようございます、綾音ちゃん」

「……おはよう」

「不動君、綾音ちゃんどうしたの？」

「……なんか第六感みたいなものを感じたらしい」

「どういうことだ？」

オカルト的なことが好きなのか、大河が興味深々といった感じで聞いてくる。

いや、オカルト的な話でなくても首を突っ込んでくるか、とどうでもいいことを考えながら説明した。

「どうやら今日俺によくないことが起こると感じたみたいなんだよね」

「第六感が……そういうのは意外と重要だからな。それにこの子はよく分からない子だから」

終夜を含め、綾音のことを深く知っている人はこの場にいない。今までそういうことがなかったとはいえ、ある程度気にしたほうがいいかもしれないと言っ湊には、終夜も同意見だった。

「まあ終夜が心配だったら一緒にいてくればいいんじゃない？今日は大規模な勧誘だけだから問題ないだろ」

これは大河の提案。

「私もそうしたほうがいいと思います。私がきちんと面倒見えますから」

希の申し出に終夜は少し迷う。

創造格闘技に出るからだ。

この子にそういう世界はまだ早い気がしていたが、悩む余地などこの時点ですでない。

自分の服を強く握っている綾音を見て、提案に乗ることにした。

「一緒に学校に来るか？」

「うん」

即答だった。

創造格闘技模擬会場。

部活勧誘をしている生徒以外の全員がここに集まっているのではないかというぐらい、大勢の人で会場が埋められていた。

その中で終夜と希がリングの前で待機している。

終夜と希は大衆の中に溶け込んでいた。

しかし、リングを挟んだ反対側にいるボクシング部の人たち。

明らかに違和感のあるオーラを放っていた。

そのオーラの種類を挙げるとしたら、殺気。

反対側にいた終夜のところにも、その殺気は伝わってきていた。

お互いの姿は見えないまでも、どんな様子が手に取るように分かる。もつとも、試合のことを気にしていたのは希だけで、終夜は落ち着いている。

希は目に見えて分かるほど、不安でいっぱいといった感じた。

そんなに弱そうに見えるかなと終夜は軽く落ち込むが、希の心配は別のことだった。

「綾音ちゃん大丈夫？」

自分から面倒をきちんと見ると言ったからか、しきりに希の様子を気にしていた。

「・・・人いっぱい」

そういえば綾音は終夜たち以外の人と面識がなかったと終夜は思い出す。

ただこの場にいただけでも体力を使うことだろう。

「辛かったらちゃんと見えよ」

終夜の言葉にうなずくも、顔色がよくない。

どうやら人が大勢いるだけが問題ではないらしい。

朝に言っていた第六感みたいなものが関係しているのだろう。

「そろそろリングに行こうかな」

試合時間が早くなるわけではないが、少しでも安心させられるように気が急ぐ終夜。

今回のルールは至極簡単。

想像は身体能力強化のみ。

実践空手はいくつか禁止事項があったが、今回は具現化をしなければ何をしてもよかった。

ちなみに八百長ではないため、本気でやってもいいとのこと。

「怪我をしないように気を付けてください」

殴り合いで怪我をしないようにというのがどれだけ高度なことか。だが希らしい言葉だった。

「ああ」

終夜は、綾音と希の頭に手をポンと置きながら、これから戦うものとは思えない調子で返事をして、リングに上がる。

リングの上にはすでに対戦者が待ち受けている。

対戦者を見ても、今朝湊の情報で知らされていたため、驚かない。というより、もともとそんな気がしていた。

「昨日は世話になったな」

相手は槇原浩二。

初日に終夜がひっ捕らえた相手だ。

「本当に対戦者として現れるとは思いませんでしたよ。出てきてませいぜいアシストぐらいかと」

これは軽い挑発。

彼が禁止されたのは部活動だけ。

文化祭運営委員会は部活動としての活動ではないと思っているのだろうか。

だがたとえ文化祭運営委員会の依頼とはいえ、ボクシング部としてここにいる以上、部活動と認識される。

カガリはそのことに憤慨していた。

もつとも、怒りをあらわにしているというより、冷たい笑顔で懲らしめてちょうだい、と終夜に言いつけたのだが。

「あの時は不意をつかれたからな。今度はそうはいかない」

不意をついてきたのはむしろそつちじゃないか、と思ったが口に出さない。

先ほど挑発をしたとはいえ、無駄な言い争いはしない。

自分が強い者でも弱い者でも、子供のような言い合いは無様なだけ。向こうはそんなことを考えてもいないようだが。

「
というわけでお前はぶっ潰す」

何がというわけなのか、まったく話を聞いていなかった終夜は適当に相槌を打った。

そして相手の分析をする。

相手はボクシング部、パンチ主体のスタイルだ。

それにボクシングは実践空手以上に禁止事項が多い。

そこをつけば戦いやすいかもしれないが、油断はできない。

この模擬戦は金的から目つぶしまでありだ。

先入観で挑むと返り討ちにされかねなかった。

そしてダウン中の相手にすら攻撃ありなのだから、危険極まりない。

もつとも今回は模擬戦なので、審判が勝負ありと見極めた時点で終了となる。

だが相手の目を見ると、殺る気まんまんといった感じだった。

「構えるよ」

相手は挑発的なもの言いだ。

「（これはなんでもしてくるな）」

ボクシング部としてここにいるのだからボクシングでくるだろうと淡い期待を抱いていたが、そうもいかないようだ。

『これより、不動終夜VS榎原浩二の創造格闘技模擬戦を始める』

榎原がボクシングスタイルで構えるのに対して終夜の構えは歪だった。

腕はボクシングの構えより低く、足はまるで走るときに構えるスタンディングスタートに酷似していた。

まるでスタートと同時に走り出しそうな構え。

どの武術にも用いられない構えに榎原は警戒する。

榎原は終夜に負けるとは微塵も思っていなかったが、未知な敵に対して反射的に警戒せざるを得ない。

加えて榎原はボクシング試合の時と同じくトランクス一枚なのに対して、終夜はジャージ姿。

格闘技をする時に着る服ではない。そういう意味でも終夜は変に目立っていた。

ちなみにヘッドギアやグローブは両者ともに着用していない。

もちろん両者ともに神が体中を巡っている。

『始め!』

審判の合図と同時に終夜は飛び出して、拳を放つ。

一撃で仕留める攻撃だ。

だがさすがボクシング部。

終夜のパンチをナックルパートで弾いてもう片方の手で殴り掛かる。終夜はそのまま体をひねって躲した。

そして躲すと同時に槇原の顎めがけて右足を蹴り上げた。

微妙な態勢ながらも左足の重心がしっかりしている。

これは横腹の筋肉が相当発達していないとできない芸当だ。

「ぐっ」

終夜の蹴り上げが見事槇原の顎に当たり、真上に吹っ飛ぶ。

だが終夜の攻撃は止まらない。

真上に飛ばされた槇原より高く飛び上がり、そのまま槇原めがけて拳を振り下ろした。

リングが揺れるほどの轟音をたてて、槇原が地面に激突する。

ここまで試合開始からわずか10秒だった。

参加者勧誘に対して行っている模擬戦にしては早すぎるタイムだ。

別に終夜は試合を長引かせるようにと頼まれてはいなかったが、当初はある程度応酬を繰り返すつもりだった。

しかし、綾音の心配を少しでも早くなくしてあげるために、短期に決着をつけたのだ。

だが終夜は、何もできなかったと言ってもいい槇原に少しばかり同情する。

副主将としても鷹左右学園の生徒としても、あまりにもかわいそうな結果だった。

「最悪な部活勧誘になってしまったな。仕方がないとはいえないま

せん」

終夜はすでに意識を失っている槇原に軽く頭を下げた。身体、創造と共に鍛えていたボクシング部副主将をたった二撃で沈めた終夜の神の密度は計り知れないものだ。

しばらく硬直していた審判が槇原の状態を確認すべく、近づく。

『し、勝者、不動終夜！』

観客が呆気にとられている中、審判の声だけが会場に響いた。

「そついえばまた目立つちまった。まあ今さらだな」

これでこの学園で終夜のことを知らない人はいなくなったかもしれない。

「不動くーん」

聞き覚えのある元気な声の方向へ振り向くと、望と大河の姿が見える。

よく見ると、湊とカガリも観客の中に交じっていた。

サボリ、といえばサボリになるが、今ほぼ全校生徒がこの場所に集まっていることを考えると、見回りもあり意味がない。

終夜はそれぞれの位置に手を振り、最後に綾音を見る。

終夜が無傷で勝利したというのに、その顔は未だに怯えている。朝以上に、尋常でないほど情緒不安定な状態だった。

「綾音大丈夫か！」

あまりにもおかしい様子の綾音に、終夜は声を荒げて問う。

よく見ると、綾音の口元がわずかに動いている。

「（ま・だ・．．．う・し・ろ・に・こ・．．．わ・い・も・．．．の・
が・．．．．．．．．．）」

かろうじて動かしている唇を終夜が懸命に読み取ろうとしている間に、不穏な空気が会場を覆った。

「不動さん!？」

希が真っ青な顔で終夜の後ろを指さして叫ぶ。

終夜も気づいて先ほど気絶していたはずの槇原を見る．．．．．
ことができなかった。

「がはっ」

振り向く前に頭に強い衝撃がきた。

あまりにも強い勢いに終夜はリングの端まで吹っ飛ばされる。

「な、なんだ？」

頭に衝撃がきたことで視界が揺れる中、なんとか正面を向いて衝撃の原因を見る。

そこには先ほど気絶していたはずの槇原が立っていた。

その目はあきらかに意識を保っていない。

あれは操られているというより、本能のまま動いているというほうが近かった。

槇原は無言。だが、負のオーラはどんどん強くなっている。

「しゅうや、逃げて!」

聞いたことのない口調で綾音は終夜に向かって叫ぶ。
だが終夜は槇原に向かって走り出した。

「しゅうや！」

「こいつをこのままにはしておけない」

綾音の制止を振り切って走り出す。

槇原は今や殺人マシーンと同義だ。

槇原の右手にありえないほどの神が流れているのを終夜は感じていた。

あれで殴られたら、並大抵の防御では防御ごと体を貫かれる。

ただ、すべての神が右手に集中しているからか、右手以外には神が流れていなかった。

終夜は一撃で仕留められると確信して、後ろ首に肘を叩きつけた。

後遺症が残るかもしれないが、仕方がない。

あの神の溜め方は尋常ではなかった。

高位な創造主なら止めることができて、あの腕を一振りでもさせたら被害は免れない。

「だが分からないな。この人がどれだけ集めてもあんな量の神があるとは」

言いかけたところで止まる。

終夜は開いた口が塞がらなかった。

目の前にありえない光景を見たからだ。

「・・・・・・・・」

槇原が立ち上がったのだ。

「ありえない。いくら本能のまま動いていたとしても、体が言うことを聞かないはずだ」

終夜が与えた攻撃は、脳に直接響くほどの打撃。

最低でも身体がマヒ状態を起こしているはずだった。

可能性としては、体が何者かに操られている場合だが、あの動きはどう見ても操られている動きではない。

そんなことを終夜が分析している間に、槇原が動く。

先ほどと同じく右手に神を溜めて地面を叩く。

衝撃でリングが壊された。

観客の中でなんとか反応できた者は、創造で防御するも、全員が無傷となるわけではない。

何人かはこれでリングの破片、衝撃からを防御できたが、槇原の攻撃はまだ続いた。

リングの破片を終夜めがけて蹴り飛ばす。

終夜はそれをはじく……。が、いつのまにか終夜の目の前に移動していた槇原が大きく神を溜めた右手で、終夜の胴体めがけて叩きこんだ。

「不動さん!？」

「おいおい、あれはやばいぜ」

希と綾音を守るために、湊と大河、望が希と綾音のところまで駆けつけていた。

「いや、あの程度なら終夜は反応できたはずだ」

終夜のことを一番よく知ってる湊が安心させるように言うが、終夜が起き上がる気配はない。

「でもあの人、また右手を振り上げてるよ」

望の言うとおり、終夜をさらに叩き潰すために槇原が拳を振り上げている。

「こつちだっ」

標的を終夜から外すために大河がビー玉をはじいて槇原に飛ばす。放たれたビー玉が槇原の額に当たるも、槇原は怯まない。それを見た希と望が意を決して、手を繋ぐ。

だがそれよりも早く、槇原は拳を振り上げたまま希の前に飛び降りた。

槇原は躊躇なくそのまま拳を振り下ろす。

「2人とも下がれ！」

近くにいる希と綾音を助けるために、大量のビー玉を握った大河が前に出て拳を止める。

だが力が一瞬拮抗するも、弾き飛ばされた。

「いたっ!!」

「・・・・・・・・っ!!」

衝撃で飛んだ地面の破片が当たったのか、希と綾音の足が切れて血が流れる。

湊も体を傷つけているが、重症ではなさそうだ。

今までフリーズしていた観客が槇原を止めるべく、創造の使用に取り掛かり始める。
だがそれよりも早く、リングのあった場所から何者かが希と綾音の前に飛び降りた。

「不動さん……………」

「しゅうや、だめ」

リングから飛び降りたのは頭から血を流した終夜だった。
しかしいつもと違い、誰でも分かるほど殺気をダダ漏れにしながら終夜は槇原を見る。

「まさかあいつ……………」

湊が指揮棒片手に創造で終夜を止めにかかる。

そこに終夜の殺気が湊に纏わりついた。

湊は得体のしれない恐怖で指先一つ動かせない。

そんな湊を見ることがもなく、血をポタポタと流しながら終夜は手の前に突き出し、ちょうど指を鳴らすような態勢になる。

パチンツ、と指が鳴る音と同時に起き上がりかけた槇原の身体が揺れる。

さらに連続で指を鳴らし続け、槇原の身体が連続で揺さぶられる。

槇原の身体は数回の攻撃ですでにボロボロだった。

肌は赤紫色になり、ところどころ折れているかもしれない。

希と望は繋いでいた手を放して、顔を覆っているほどだ。

それでも終夜はおかまいなく、最後に一発、大量の神が終夜の突き出した指先に溜めてとどめを刺そうとする。

先ほどの槇原の右腕に近いほどの膨大な量だ。

「もうやめろ、終夜。これ以上攻撃する必要はない。お前が綾音ちゃんを怯えさせてどうするんだ」

指をならしかけたところで、湊が止めに入った。

諭すような静かな声。

しかし湊の終夜の腕を掴む手は、力強く握られている。

先ほどの得体のしれない恐怖が湊から槇原に移ったからでもあったが、それ以外にも「親友」として止めることができたのだろう。すでに槇原は完全に行動不能になっている。

「綾音の恐怖の元は俺だったんだな」

湊の声で正気に戻った終夜は、悲しげな声でポツリとつぶやた。

第九話 部活動誘二日目（創造格闘技）（後書き）

昨日は諸事情により投稿できませんでした。
明日は午前11時ごろに投稿する予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6951y/>

想像が創造を具現化させる

2011年11月30日11時46分発行